第1章　総　論

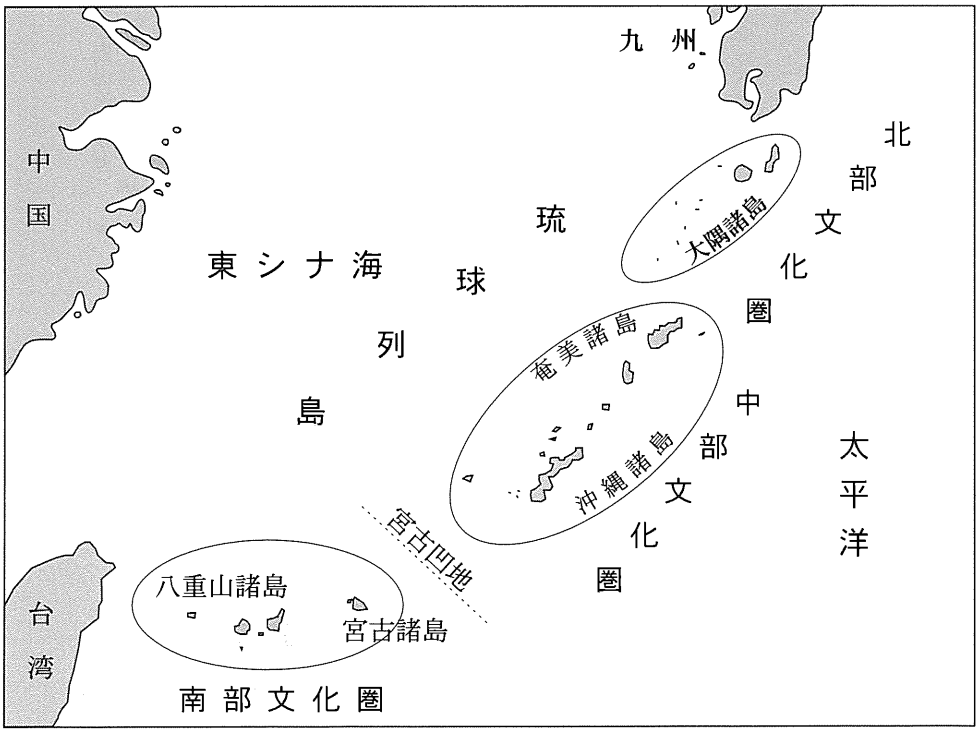
Ⅰ　先島文化圏（宮古・八重山）の先史文化と自然環境
Ⅱ　八重山考古学研究概史
Ⅲ　八重山の先史時代・原史時代の編年論
Ⅳ　先土器時代（旧石器時代）
Ⅴ　新石器時代

Ⅰ　先島文化圏（宮古・八重山）の先史文化と自然環境

一、先島文化圏の位置

九州の南端薩南半島から台湾にかけて弧状に連なる一八八の島々（うち有人島六八島）を、南島（南西諸島・琉球列島）と呼んでいる。北の屋久島、種子島から、トカラ列島、さらには奄美諸島、沖縄諸島を経て、宮古諸島、八重山諸島まで一千二百キロメートルにわたって連なる島々[1]である。この南島の最南端の島々の八重山諸島の南にはフィリピンのルソン島、西には台湾島が控えている。行政区分上は南島の北半分（奄美諸島以北）の島々が鹿児島県、南半分（沖縄諸島以南）が沖縄県に属している。

南島に点在する島々の中でも沖縄諸島までは一つの島から隣接する島が見えるために、有視界渡海が可能であり島伝いの移動が比較的容易である。そのためか、この沖縄諸島が縄文・弥生式土器文化伝播の南限となっている。ところが、沖縄本島と宮古島との間には水深約一千メートル、距離にして約二百キロメートルの宮古凹地が横たわっているために有視界渡海が困難で、先史時代においては人々の往来が妨げられたと考

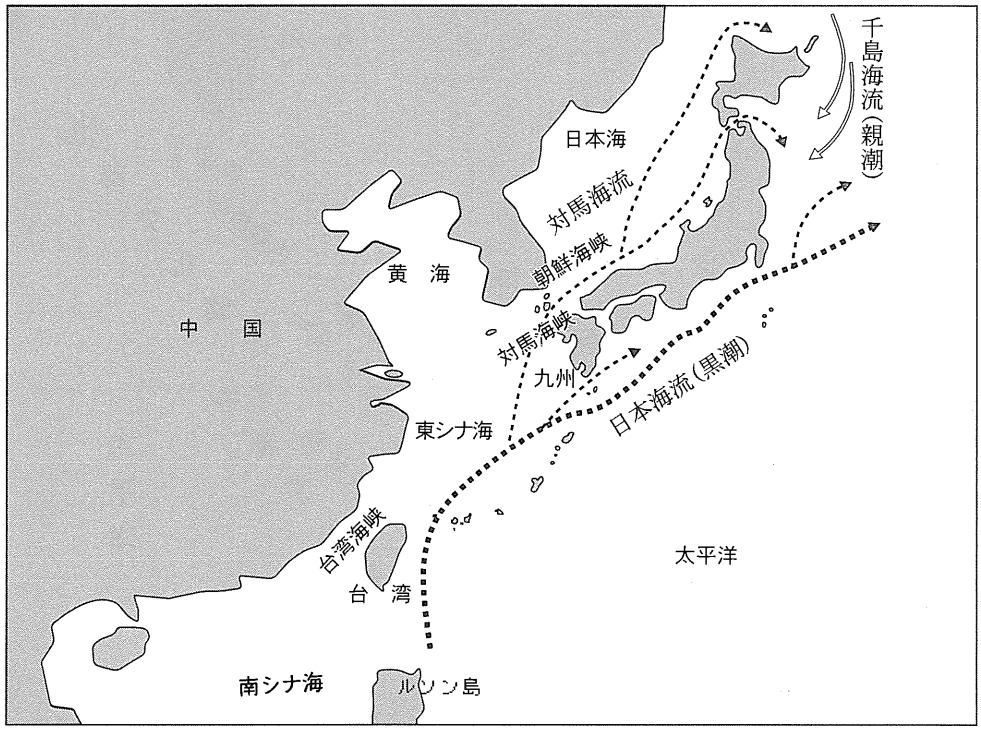


地図１　南島の先史時代の文化圏（國分直一『南島先史時代の研究』1972年、注２より）

えられている。

南島は先史時代の土器の諸特徴にもとづいて考古学的には大きく三つの文化圏[2]に分けることができる。すなわち、九州島の先史文化圏に属し、縄文式土器文化や弥生式土器文化の波及を濃く受けた種子島・屋久島を中心とする「北部文化圏」と、多少の縄文・弥生式土器文化の波及を受けながらも独自の土着文化が展開した奄美・沖縄諸島の「中部文化圏」、そして、全く縄文・弥生式土器文化の波及を受けず、むしろ台湾やフィリピンなどの南方文化と関連があると思われる宮古・八重山諸島の「南部文化圏」の三つである。この宮古諸島と八重山諸島を併せて「先島諸島」といい、南部文化圏を別名「先島文化圏」とも呼ぶ。

先島諸島は、宮古島を中心に点在する八つの島々からなる北の宮古諸島と、南は西表島と石垣島を中心に大小三二余の島々からなる八重山諸島へと連なり、そして西端の与那国島、尖閣列島を経由して中国大陸に接している。先島諸島は台湾の台北と同緯度にあり、六月から一一月にかけての晴天の日には与那国島から水平線上に台湾島がくっきりと見えることがある。先島諸島は台風が頻繁に襲来するので台風銀座と呼ばれ、年間平均気温が二三・七度と年中暖かい常夏の地であり、海洋性亜熱帯気候に属している。このあたりは、赤道の北側を東から西に向かう黒潮がフィリピンの東側で北方に向きを変え、台湾の東方を通り、琉球列島沿いに北上して行く地域でもある。この「先島文化圏」の中核をなす八重山諸島は、その独特な自然や文化のみならず、日本の最南端の島々であるために黒潮文化、或いは南方文化伝来の海上の道[3]の窓口としても注



地図2　日本海流（黒潮）

目されてきた。

二．先島文化圏の自然環境

宮古諸島は隆起サンゴ礁の石灰岩で形成された低平な島である。また、八重山諸島は約一億七千四百万年前より隆起沈降を繰り返しながら現在のような形になったといわれている。八重山の島々は石灰岩の低平な島と大陸塊から切り離された古い地層[4]（トムル層、冨崎層）をもつ高い島からなる。水や石材や動植物資源に乏しい前者に対し、後者は石器材料や食糧（イノシシ、ヤマイモ[5]など）、及び水の豊富な島々である。この宮古諸島・八重山諸島の自然環境は先史時代の人々の定住に大きく影響している。

八重山諸島の西表島や石垣島の大きな河川の河口には、オヒルギ、メヒルギ、ヤエヤマヒルギなどが密生しマングローブ林が広がっている。そのマングローブ林の近くに板根を形成するサキシマスオウノキが生え、海岸近くにはタコの足のような根をおろしているアダンなどの海流散布性の植物があって熱帯的な景観をなしている。一属一種のヤエヤマヤシなどの八重山諸島独特の植生も見られる。また、東南アジアや中国南部から続く暖帯林の一部を成すといわれるイタジイなどのシイ林が西表島や石垣島でも見られる。特に台湾に分布しないにもかかわらず、南のフィリピンから飛び地のように分布する北限種のニッパヤシはユニークな存在である。植物相にはマヤプシキ、ヤエヤマシタンなどのように自生の北限種と考えられる植物もある。

琉球列島には、地質時代の中国大陸から陸橋（海退期に一時的に海底が陸化したもの）伝いに渡来してきた生きた化石ともいうべき動物[6]たちが棲息している。石垣島に棲息し、氷河期（約一五〇万年前）の生き残りといわれる古代蝶「アサヒナキマダラセセリ」や西表島の「イリオモテヤマネコ」などはその典型である。またワシタカ科の「カンムリワシ」は石垣島と西表島に分布する北限種である。「セマルハコガメ」は台湾および中国南部にも棲息しており、八重山はその北限である。このような稀少な動物たちを擁する八重山を含む琉球列島は「東洋のガラパゴス」と呼ばれている。

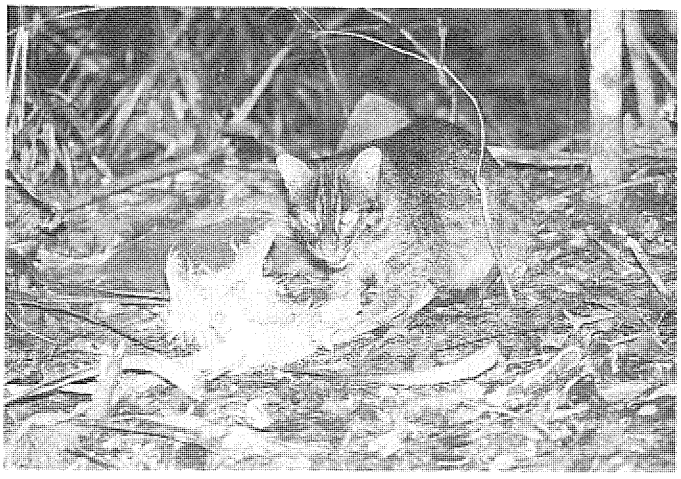


写真１　イリオモテヤマネコ（撮影：阪口法明氏）

このような地史的背景及び生態学的環境の上に、先史時代以来、八重山における人類の暮らしが連綿と営まれて来たのである。

八重山諸島の先史時代の赤色土器文化と無

表1　宮古諸島と八重山諸島の自然環境及び文化の比較

			宮古諸島	八重山諸島
自然環境	地形		・八の島々 ・有人島（八島） ・琉球石灰岩でできた低い島	・三二の島々 ・有人島（一二島） ・琉球石灰岩でできた低い島や山と川のある大小の高い島から成り立っている
	化石・動物群		・ゴンホテリウム象の化石 ・トリロホドン象の化石 ・化石人骨有 ピンザアブ人 （二万五千年前） ・化石獣骨有 ヤマネコ、ノロジカ　イノシシ、ヘビ、ケナガネズミ ・イノシシ無生息 ・蛇類は無毒である	・化石人骨今のところ不明 ・化石獣骨有 リュウキュウジカ、クマネズミ、ヤエヤマコウモリ、ミナミイシガメ ・イノシシが生息している ・蛇類には有毒の蛇もいる
遺跡の立地と出土遺物・他	先史時代	「第一期」 赤色土器時代	・一ヵ所 ・今のところ多良間島の添道遺跡だけ ・石斧や土器などの出土遺物が少ない	・一九ヵ所 ・波照間島、石垣島、西表島、与那国島などに分布している ・立地場所によって共伴する遺物の種類や量が変わる
		「第二期」 無土器時代	・四ヵ所 ・宮古島の浦底遺跡、長間底遺跡 ・浦底遺跡はその時代の最古の炭素14年代二五二〇年がでた。 又、シャコガイ製貝斧が多量（二〇〇点以上）に出土した ・石斧が少ない	・四四ヵ所 ・八世紀から九世紀頃にかけて使用された中国の銭貨「開元通寶」が出土 ・一二世紀頃の遺跡から滑石製石鍋（長崎県西彼杵半島産）、類須恵器（徳之島カムィヤキ系陶器）、中国製の白磁端反り碗、白磁玉縁碗、褐釉陶器、鉄鑿等が出土
	原史時代	「第三期」 スク時代	・「城」の字をグスクと称している。 ・集落跡を「元島」と呼び、ほとんどが拝所遺跡である。 ・壺形の宮古式土器[7]が主体である。又、古い遺跡からは八重山の鉢形外耳土器の範疇にある土器が出土した	・スクと呼び、「底」か「城」の字を当てている。 ・集落跡を「元村」と呼ぶ。また石垣島では一六世紀頃、スク時代の遺跡が忽然と消滅した ・鍋形の外耳土器が主体

表２　先島文化圏の島々（有人）の先史・原史時代の遺跡数

諸島名		編年 / 島の名前（面積）		先史時代 第一期 赤色土器時代	先史時代 第二期 無土器時代	原史時代 第三期 スク時代
八重山諸島	高い島	1	西表島（284.44km²）	6	12	31
		2	石垣島（221.09km²）	11	25	69
		3	与那国島（28.52km²）	1	1	14
		4	小浜島（8.14km²）		3	5
		5	内離島（2.16km²）			1
	低い島	6	波照間島（12.46km²）	1	1	15
		7	黒島（9.83km²）			10
		8	竹富島（5.41km²）		1	9
		9	鳩間島（1.01km²）		1	3
		10	上地島（1.76km²）			4
		11	下地島（1.55km²）			2
		12	由布島（0.12km²）			
		13	嘉弥真島（0.39km²）			1
宮古諸島	低い島	1	宮古島（158.37km²）		4	43
		2	伊良部島（30.48km²）			7
		3	下地島（9.65km²）			
		4	来間島（2.83km²）			1
		5	池間島（2.77km²）			2
		6	大神島（0.27km²）			1
		7	多良間島（19.98km²）	1		15
		8	水納島（0.54km²）			1
計				20	48	234

※　原史時代の遺跡数は、沖縄県教育委員会発刊の『グスク分布調査報告書（Ⅱ）－宮古諸島－第94集 1990年』と『グスク分布調査報告書（Ⅲ）－八重山諸島－第113集　1994年』などの注８を参考にした。各島々の空白は、現在遺跡が不明か、またはその当時の遺跡が無いかを示している。

土器文化、及び歴史時代への過渡期のスク時代の各文化は黒潮の道のただ中で形成されてきた。小さな島嶼であるゆえに民族の移動と交流によって文化が断絶したり、また複合・淘汰されたりすることもあったであろう。文化は島から島へ連鎖的に伝播（ドミノ現象）したかもしれない。人災、天災などを避けるため、不便な島の奥地（内陸部）や山岳地帯のアブ（洞穴、岩陰）などの安全なところに逃避したり、また、凶作、不作、不漁（猟）などが続く場合に、人々は新天地を求めて移動したであろう。時には集団が絶滅することさえあったかもしれない。様々な理由で先史時代の島社会では移住と拡散が繰り返されたはずである。そうした仮説のもとに現在の考古学的調査研究が進められている。

八重山の遺跡は、大部分が包含層（生活層）が薄く、複合遺跡も少ない。ところが小さな島々である割りには遺跡の数が多い。こうした遺跡数や遺跡立地の変化の背景にはいかなる理由があったか、今後、究明されなければならない課題である。

三．先島文化圏の時代区分

一九五九年七月～八月にかけて早稲田大学八重山学術調査団（団長滝口宏）により八重山諸島の新石器時代遺跡の波照間島下田原貝塚、西表島の仲間第一貝塚（無土器）、仲間第二貝塚、スク時代の西表島の平西貝塚、石垣島の山原貝塚の学術的な発掘調査が行われた。調査の結果、八重山の先史文化の特異性が明らかとなり、一九六〇年の早稲田大学編年では無土器を「第一期」、土器少量の「第二期」、土器の多量・海外交易を「第三期」する八重山独自の編年[9]が組まれた。

近年の発掘調査によって、かつて古いとされた「第一期」の無土器文化の遺跡から銭貨「開元通寶[10]」（六二一年初鋳）が発見されたり、或は第一期の終末とされた遺跡から滑石製石鍋（長崎県西彼杵半島産）や類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）、中国製の薄手の白磁端反り碗・白磁玉縁碗、褐釉陶器壷、鉄製品（鉄鑿）等が検出されたことから「第一期」の終末は一二世紀頃ということが判明[11]した。

また、先史時代の各遺跡の炭素14測定法年代においても、無土器の「第一期[12]」（約二千五百年前から一二世紀頃）と土器少量の「第二期[13]」（約四千年前から三千三百年頃まで）とが年代的に逆転することが明らかとなった。さらに、一九七八年には、石垣島の「第二期」の大田原遺跡[14]（丘陵）とその直下の「第一期」の神田貝塚（低砂丘）とに続いて一九八三～八五年、下田原貝塚（第二期）とそれに隣接する大泊浜貝塚（第一期）との層位関係が再度確認された。即ち、最下層の下田原貝塚の土器の少量「第二期」後に、無土器「第一期」の大泊浜貝塚[15]が続くことが層位的

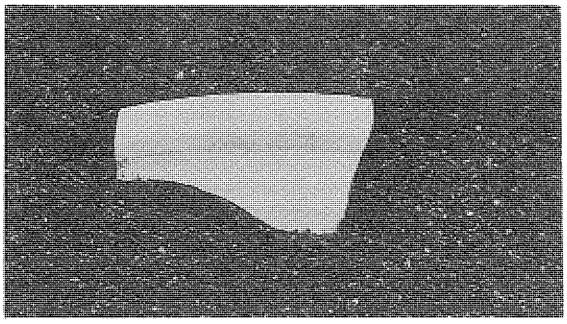


写真2　波照間島大泊浜貝塚の第4層から出土した白磁玉縁碗
（沖縄県教育委員会『下田原貝塚・大泊浜貝塚』1986年、注11より）

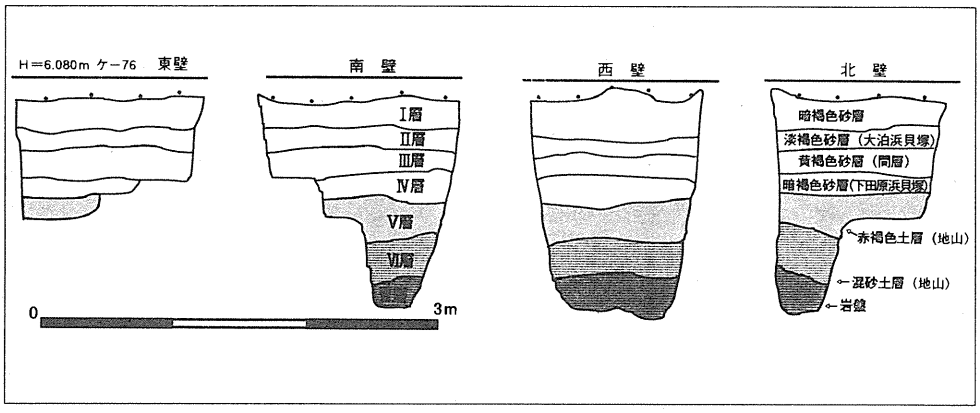


図１　下田原貝塚（Ⅳ層）と大泊浜貝塚（Ⅱ層）の層位的な関係
（沖縄県教育委員会『波照間島下田原貝塚・大泊浜貝塚』1986年、注11より）

に実証され、早稲田大学編年の第一期（無土器）と第二期（有土器）とが逆転することが確定したわけである。定説となっていた早稲田大学編年の大修正が必要となった。

時代区分について、岡山大学の近藤義朗名誉教授は、「特徴的で、重要で、普遍化していく考古資料」をもってなされるべきだと述べている。[16] 歴史学では文献の有無や多少によって「先史時代」[17]、「原史時代」[18]、「歴史時代」に分ける時代区分が伝統的になされてきた。

一九六〇年の早稲田大学編年[19]では研究の初期にあって、八重山の先史文化の特異性を認識しつつも、それに固執せず、相対的視野に立つために個別名称を用いず「第一期」、「第二期」という中立的立場から時代区分がなされている。

また、安里嗣淳氏は、先島の先史文化を新石器時代の「前期」、「後期」という名称で二期に区分している。[20] この安里嗣淳氏編年の先島の新石器時代の「前期」、「後期」の時代区分は、沖縄本島の貝塚時代の「前期」、「中期」、「後期」の編年のように同一起源文化の歴史的発展を暗示しているようで誤解を招くことが考えられる。

近年、その文化を「下田原期」[21]などの名称の遺跡名については、波照間島、西表島の二か所のみならず広く普遍的に分布する遺跡であれば問題ないのだが、石垣島、与那国島、多良間島など二〇ヵ所程の同時期の遺跡の中で下田原貝塚のような豊かな文化を有する遺跡はひとつもないのに、一時期・一地域の文化にすぎない下田原貝塚をその時代を総括した名称の「下田原期」とするのはどうであろうか。筆者は土器の多少、有紋土器の有無、それぞれの遺跡の立地場所、共伴遺物の相違は地域的・文化的な相違ではなく年代差だと考えている。その点、高宮廣衛沖縄国際大学教授の言う「有土器時代」[22]と「無土器時代」という名称による時代区分は明確である。

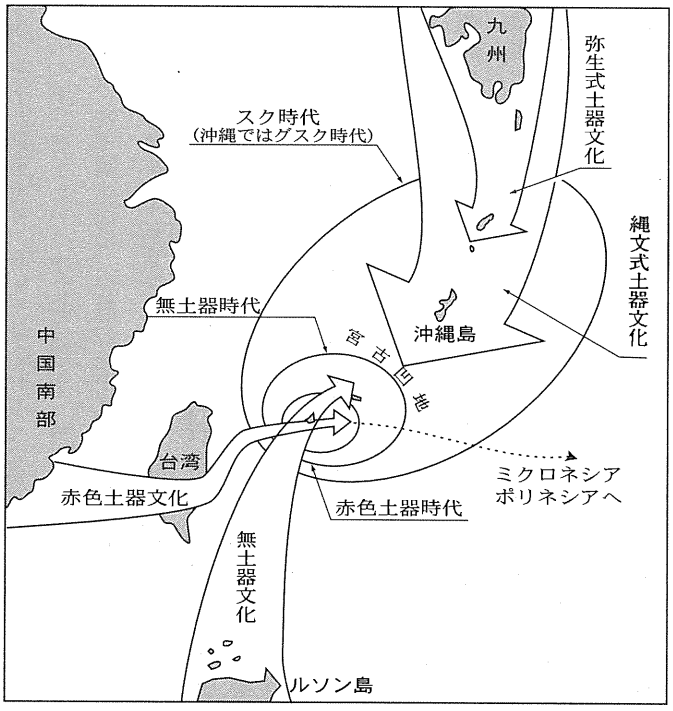
筆者は一九七七年夏に石垣島のフーネ丘陵から爪形文の有紋土器や牛角状把手、石錐などの発見をきっかけに新田重清氏らと共同研究の成果を新聞紙上で発表し、土器の表面が赤色、または赤褐色を帯びていることからこれらの土器を総括した名称を「赤色土器」[23]と呼んだ。筆者はこの土器文化の源流が東南アジアの土器文化（台湾南部）にあるのではな

いかと考え、早稲田大学編年でいう先史時代の「第一期」を赤色土器文化[24]または有土器文化、「第二期」を無土器文化とした。この場合の有土器から無土器は文化一元論ではとらえられないと考える。

また、歴史時代への過渡期の原史時代には先島諸島（宮古・八重山諸島）は沖縄本島と同一文化圏に統合される。沖縄本島ではその時代をグスク時代と呼んでいるが、石垣島ではグスクのことを○○スクと呼んでいる。○○スクとは本来地名であり、スクと名のつく場所からは中国製の貿易陶磁器が採集される。そこで筆者は沖縄本島のグスク時代に相当する時期の八重山をスク時代[25]と呼んだ。

八重山の新石器時代の先史時代「第一期」赤色土器時代、それに続く「第二期」無土器時代、及び原史時代であるスク時代（沖縄諸島ではグスク時代と呼んでいる）の諸文化は、様々な文化要素が入り交じっていて複雑である。今までのところ、先史時代のうち約四千年前頃から三千三百年[26]前頃までを「赤色土器時代」と呼び、厚手平底で独特の牛角状の把手のつく土器を指標としている。約八百年間のミッシング・リング（空白時代）を置いて、約二千五百年前頃から一二世紀[27]前半頃までが「無土器時代」であり、土器が出土せず、シャコガイ製貝斧及び多数の焼石の出土を特徴とする。焼石はおそらく石蒸焼（Stone oven）料理に用いられたものと考えられている。その後、中国との交易を求めて人々が九州あたりから南進して定着し、南島経営に乗り出す一二世紀頃から一六世紀頃にかけての「スク時代」へと続いている。

先島の赤色土器文化、無土器文化、スク時代の文化は、①「西からの道」、②「南からの道」、③「北からの道」それぞれを経由した人と文化の流れが幾重にも折り重なり複雑な様相を呈している。八重山の基層文化は大陸的文化要素（赤色土器の有土器時代）・南方的文化要素（無土器時代）・北方的文化要素（スク時代）が複雑に絡み合いながら形成されているのである。これは、八重山が大陸と島々を結びつける位置にあったからであり、永い年月にわたって、民族や文化の交流ルートの架



地図3　赤色土器文化・無土器文化の起源と縄文・弥生式土器文化の伝播

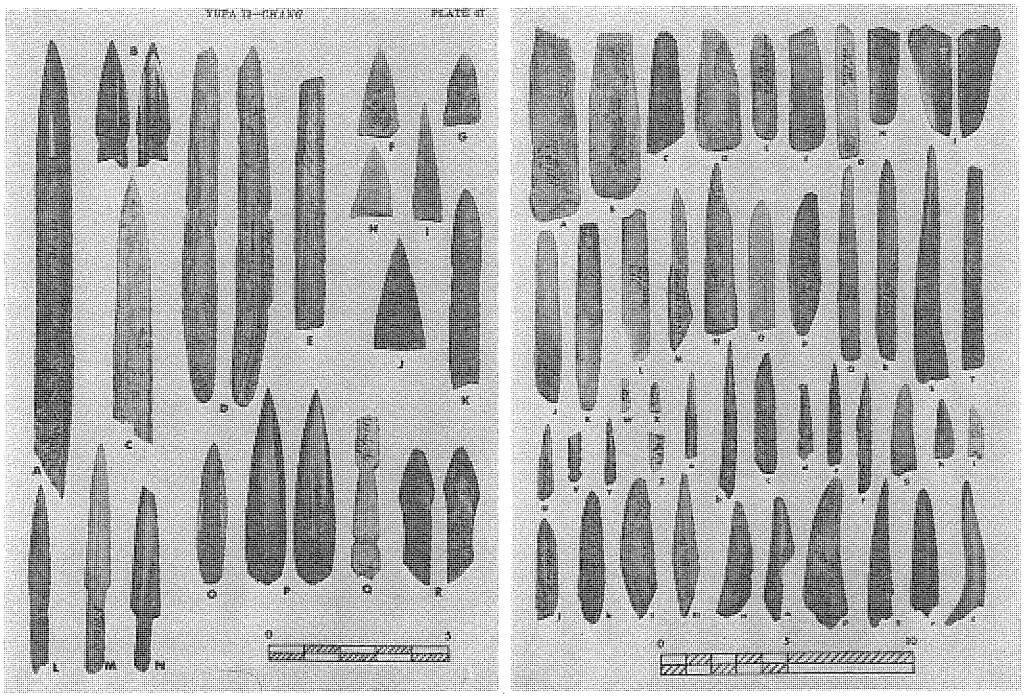


写真３　(a) ポイント状骨角器。鳳鼻頭（台湾）　　(b) 骨製、角製の針、キリ。鳳鼻頭（台湾）

（Chang, Kwan Chih. *Fengpitou, Tapenkeng and the Prehistory of Taiwan*. Yale University Publications in Anthropology, No.73. 1969. ）

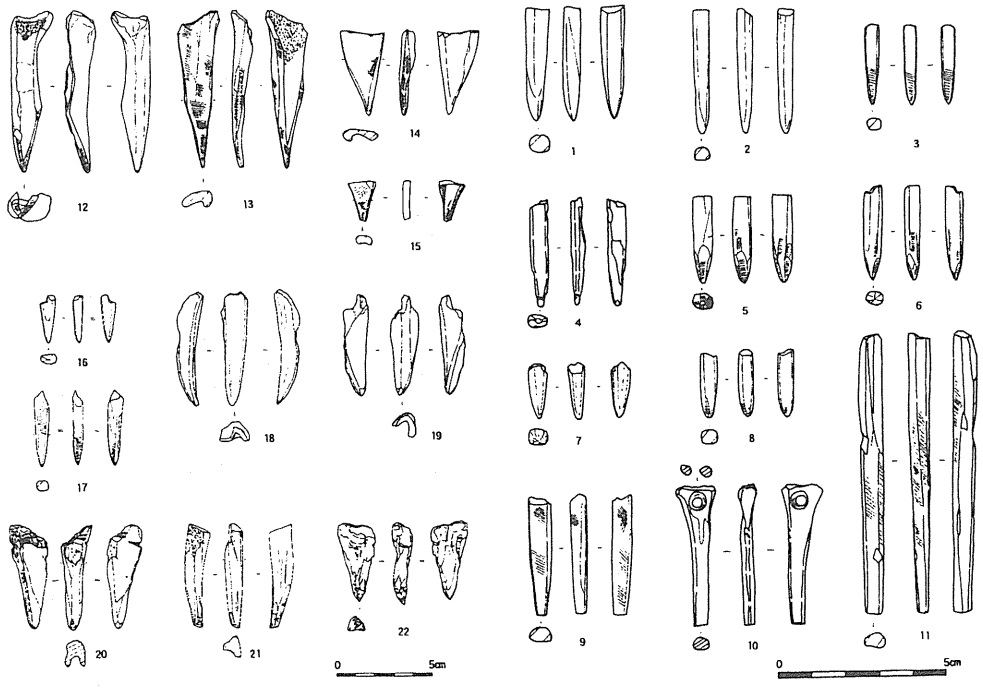


図２　下田原貝塚出土の骨錐、骨針

（沖縄県教育委員会『波照間島下田原貝塚・大泊浜貝塚』1986年，注11より）

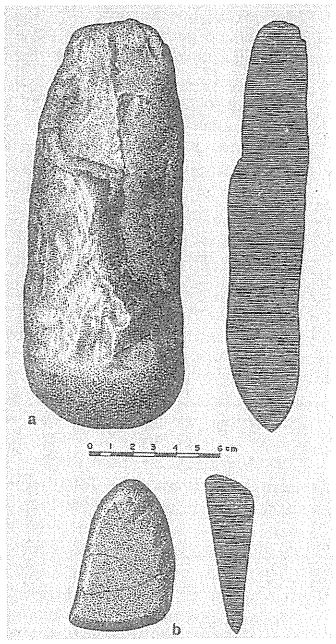


写真4　刃部磨製石斧

(a)ピランドゥック洞穴出土　(b)マラマイ洞穴出土

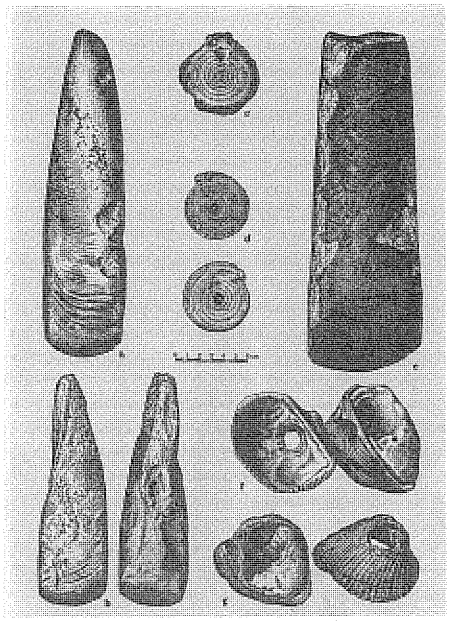
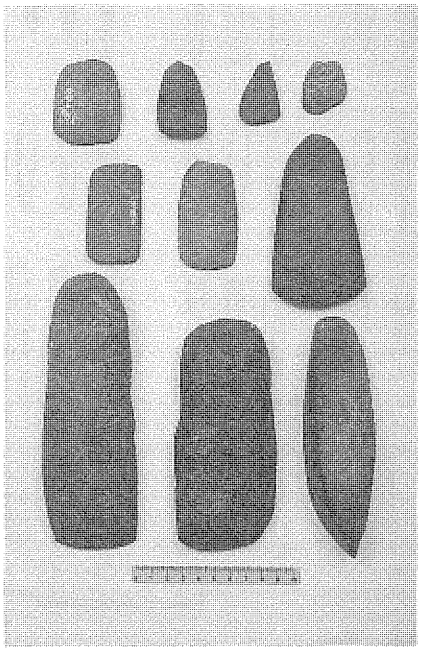


写真5　ドゥヨン洞穴（フィリピン）の新石器時代墓に共伴する遺物

(a)シャコ貝製貝斧　(b)小型シャコ貝製貝斧（表、裏）
(c)貝製ペンダント　(d)貝製有孔円盤の耳飾（表、裏）
(e)磨製石斧　(f)石灰容器
(g)石灰容器（バトゥ・プティ洞穴出土）

（Fox, R. B. *The Tabon Caves: Archaeological Explorations and Excavations on Palawan Island, Philippines*. Monograph of the National Museum No.1, Manila. 1970. ）



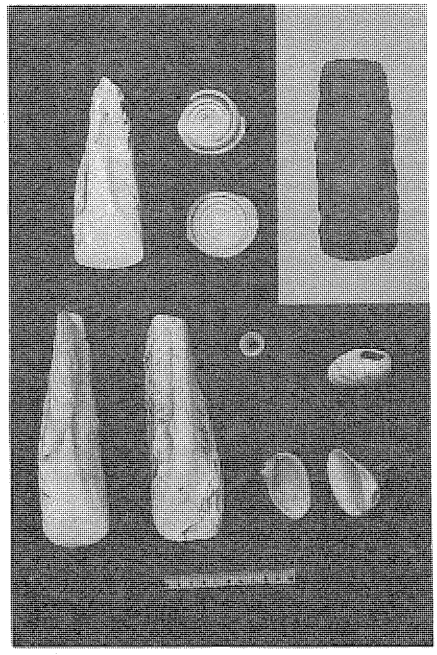


写真6　名蔵貝塚群から採取されたシャコガイ製貝斧、イモガイ製装飾品、磨製石斧

橋として複雑な文化要素を内包することとなったのである。

① 大陸系の文化

中国南部や台湾などの先史時代の遺跡から出土する骨針・骨錐・石針・石錐、磨製尖頭器などに類似する遺物[28]が、八重山の赤色土器時代の遺跡から出土している。約四千年前頃、「西からの道」によって中国南部、台湾を経由して伝播した赤色土器文化を受容した可能性が高い。

② 南方系の文化

フィリピンのパラワン島のドゥヨン洞穴[29]から出土したシャコガイ製貝斧や磨製石斧、イモガイ製の装飾品やサルボウの貝殻に穿孔を施したもの等に類似した遺物が無土器時代の名蔵貝塚群から採集された。このことから、フィリピンなどの「南からの道」を通じてシャコガイ製貝斧や石蒸焼調理に特徴づけられる無土器文化を受容した可能性がある。

③ 北方系の文化

一二世紀頃の無土器時代終末期（スク時代の初期）の遺跡から滑石製石鍋[30]（長崎県西彼杵半島産）や類須恵器[31]（徳之島のカムィヤキ系陶器）などが出土している。類須恵器を生産した徳之島伊仙町のカムィヤキ古窯跡に隣接したヨヲキ洞穴から、徳之島の考古学者義憲和氏によって花崗岩製の鞴（ふいご）羽口が一点発見された[32]。類似の石製鞴の羽口が首里城[33]及び八重山の石垣島[34]、西表島[35]、与那国島[36]、波照間島[37]などのスク時代から近世にかけての遺跡から出土している。

「北からの道」を通じて九州から鉄器などの新しい文化を受容し、一四～一六世紀には中国南部との交易も行われたようだ。

スク時代の鉄器の受容について民俗学者谷川健一氏は『古代海人の世界』（一九九五年）のなかで、「石鍋が奄美大島の笠利、沖縄本島の浦添市伊祖や西原町我謝、一〇か所ほどの古いグスクから出土している。特に注目されるのは、アマミキヨと関係のある今帰仁城跡やミントングスクから出ている。また第一尚氏の根拠地である佐敷グスクからも出土している。第一尚氏は日本本土と特に関係が深い。沖縄へ鉄器が導入された一二～三世紀頃は、石鍋の製作搬入された時期と符合する。この時期に九州から南下した人たちは、石鍋をたずさえ、また製鉄技術をもったひとたちであったと考えられないだろうか[38]」と、示唆的な見解を発表している。

高宮廣衛教授は、沖縄本島の読谷村の渡具知東原遺跡から九州の縄文時代前期の曽畑式土器と同早期の爪形文土器が発見（一七九五年）されたのを契機として暫定編年試案（一九八三年）を提示した。さらに九州編年と対照して「沖縄諸島の暫定編年[39]」を発表している。筆者は、この沖縄諸島（沖縄本島）の暫定編年を参考にして中部文化圏（奄美・沖縄諸島）と先島文化圏（宮古・八重山）との対照編年表を次頁のように作成してみた。

先島文化圏の代表的な遺物には半磨製石斧・局部磨製石斧[40]やシャコガイ製貝斧、そして独特な形態の土器がある。

半磨製石斧・局部磨製石斧は、先島の赤色土器文化、無土器文化、ス

表3　沖縄諸島の暫定編年（高宮編年）と先島文化圏の大濱編年との対比

九州			高宮廣衛「暫定編年」（1988年）を筆者が一部修正					先島文化圏の編年（大濱）				
			暫定編年	土器の型式	沖縄諸島発見の九州系の土器	その他の年代資料	現行編年	編年試案			遺跡名及びC14推定年代	その他の編年資料
8,000	縄文時代	早期	前期 I	ヤブチ式土器 東原式土器	爪形文土器	ヤブチ式 6,670±140Y.B.P 東原式 6,450±130Y.B.P	早期	先史時代	?↑赤色土器時代↓?	?↑第一期↓?	大田原遺跡 3,970±90Y.B.P 下田原貝塚 3,290±90Y.B.P	
5,000		前期	II	室川下層式土器 曽畑式土器 条痕文土器 神野A式土器 神野B式土器	曽畑式土器 条痕文土器	曽畑式 4,880±130Y.B.P （渡具知東原）						
		中期	III	具志川式土器 神野C式土器 面縄前庭式土器								
4,000 3,900		後期	IV	神野D式土器 神野E式土器 伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式（室川） 3,600±90Y.B.P 伊波式（熱田原） 3,370±80Y.B.P	前期					
3,200 3,000		晩期	V	室川上層式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器		宇佐浜式は黒川式並行とみられる	中期					
2,500												
2,300	弥生時代	前期	後期 I	真栄里式土器	板付II式土器 亀ノ甲類似土器		後期		?↑無土器時代	?↑第二期	浦底遺跡 2,520±75Y.B.P 名蔵貝塚群 2,200±90Y.B.P	
		中期	II	具志原式土器	山ノ口式土器							
		後期	III	アカジャンガー式土器	免田式土器	アカジャンガー式は中津野式並行とみられる						
古墳時代 〜 平安時代			IV	フェンサ下層式土器		類須恵器					仲間第一貝塚 1,250±65Y.B.P	開元通寶 滑石製石鍋
鎌倉時代			グスク時代	注：「フェンサ下層式は城時代初期」とする見解もある				原史時代	スク時代	第三期		類須恵器、中国製の玉 緑白磁碗等

※．先島文化圏の編年の「？←」は文化の上限、「→？」は文化の下限の年代、及びその様相が現在のところ不明であることを示す。また「〰〰」の波の中はミッシング・リングを示す。先島文化圏は12世紀頃から沖縄諸島のグスク文化圏に統合されるが、八重山ではスクと呼び、中国商人らと自由奔放な密貿易（私貿易）によって独自の文化を築いた。

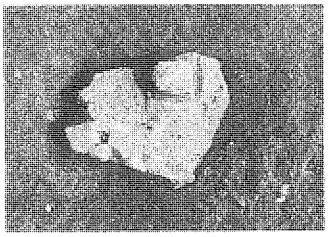


写真７　大泊浜貝塚出土の滑石製石鍋
（沖縄県教育委員会『下田原貝塚・大泊浜貝塚』1986年、注11より）

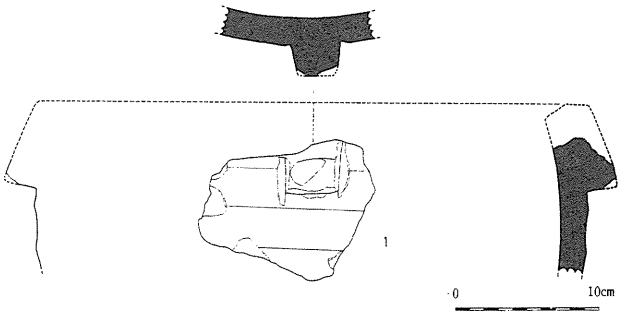


図３　波照間島大泊浜貝塚出土の滑石製石鍋
（沖縄県教育委員会『波照間島下田原貝塚・大泊浜貝塚』1986年、注11より）

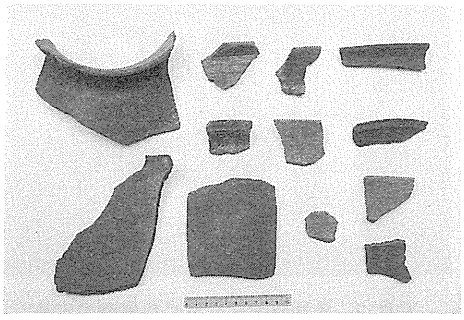


写真８　ミンツキ古集落跡採集の類須恵器

写真９　徳之島伊仙町のカムィヤキ古窯跡近景

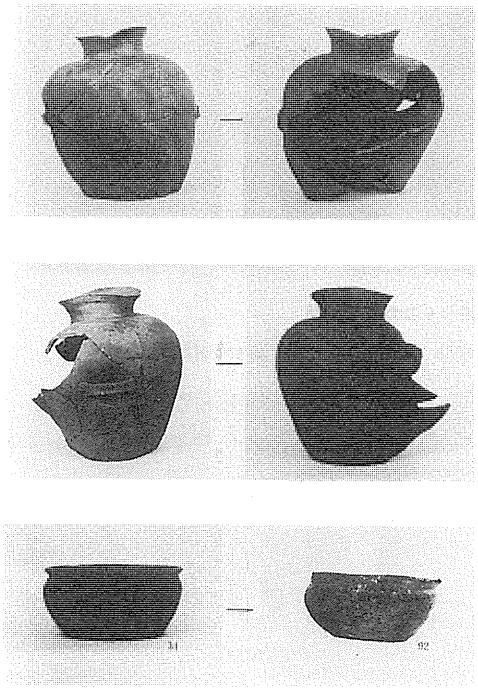


写真10　カムィヤキ古窯跡から出土した類須恵器

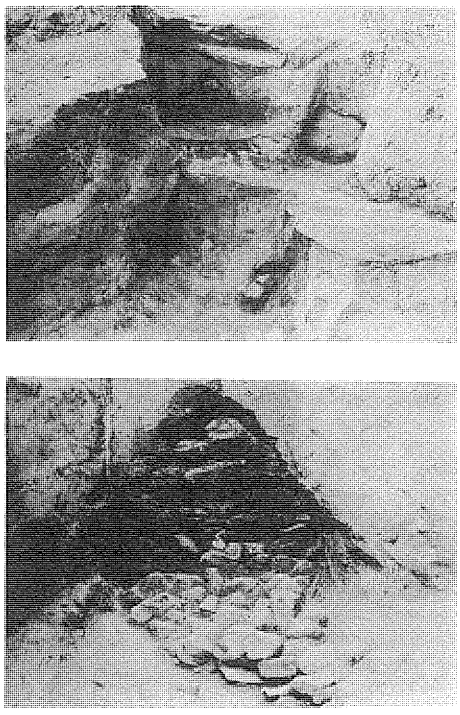


写真11　カムィヤキ古窯跡

（伊仙町教育委員会『カムィヤキ古窯跡』1985年、注31より）

ク時代の遺跡のいずれからも出土している。

この種の局部磨製石斧はかつて東南アジア大陸部のホアビニアンおよびバクソン文化[41]との関連が示唆されていたが、今日ではこの考え方は否定され、局部磨製石斧は東南アジアの各地域で独自に発生したと考えられている。八重山の半磨製石斧は石垣島、西表島で豊富に産する緑色片岩などを利用し、最小限の剥離を施して刃部から胴部にかけて研磨したものである。半磨製石斧が多数出土するので、八重山の先史文化は別名「八重山半磨製石斧文化」とも呼ばれている。

先島の赤色土器文化、無土器文化、スク時代を特徴づけるもう一つの遺物はシャコガイ製貝斧[42]である。宮古島でも無土器時代の浦底遺跡[43]から二〇〇点以上ものシャコガイ製貝斧が出土している。このシャコ

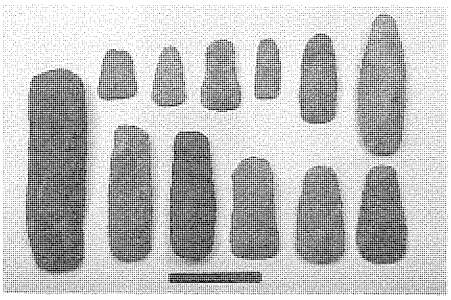


写真12　平地原遺跡採集の半磨製石斧

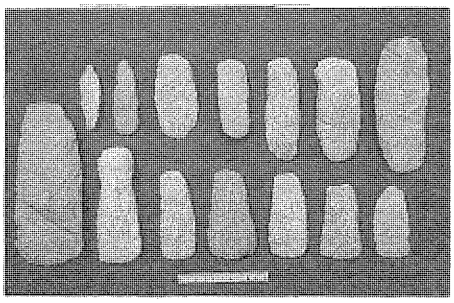


写真13　平地原遺跡採集の局部磨製石斧

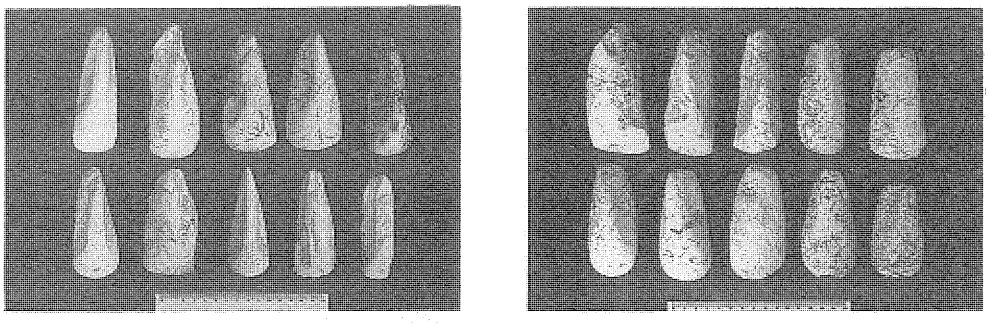
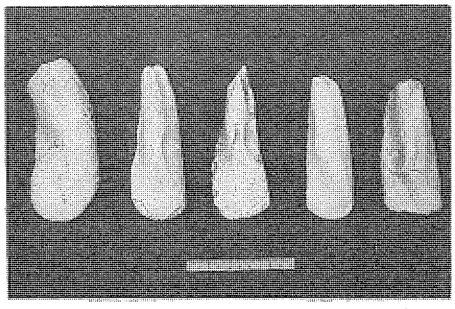
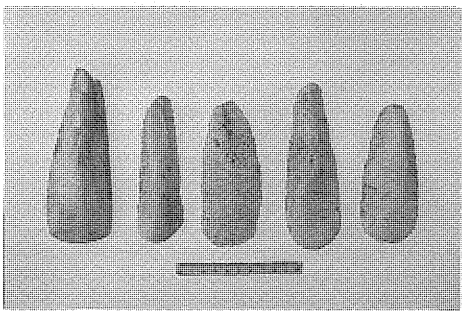


写真14　宮古島浦底遺跡出土のシャコガイ製貝斧

(*The Urasoko site-A Sketch of the Excavationsin Photographs.* Gusukube Town Board ofEducation, 1990.)



(第2地点)



(第13地点)

写真15　名蔵貝塚群採集のシャコガイ製貝斧

ガイ製貝斧はオオジャコなどのちょうつがい部分を利用したもので、その分布はシャコ貝の棲息域とも深い関係があり、類似のシャコガイ製貝斧がオセアニア、特にフィリピン[44]の先史時代の遺跡からも発見されることから、太平洋島嶼部との関連を示す重要な遺物として注目されている。

土器もまた個性的であり、浅鉢形で口縁近くに牛角状の大きな把手のつく器形（いわゆる「下田原式土器[45]」）は約四千年前頃から三千三百年[46]前頃の赤色土器時代に登場する。後代、一二世紀以降のスク時代に出現する土器は、同じ把手でも一対ないし二対の小さな半月形（耳状）の把手を備えたものであり、「外耳土器[47・48]」と呼ばれている。

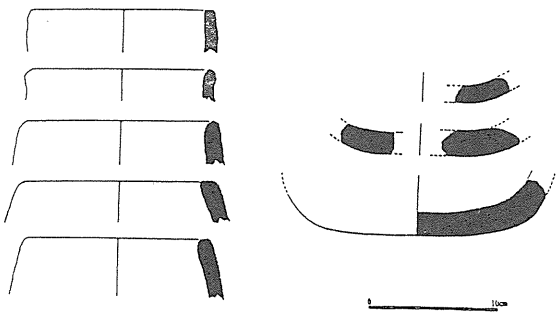


図4　波照間島の下田原貝塚から出土した土器

（國分直一、他『琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査』1964年、注45より）

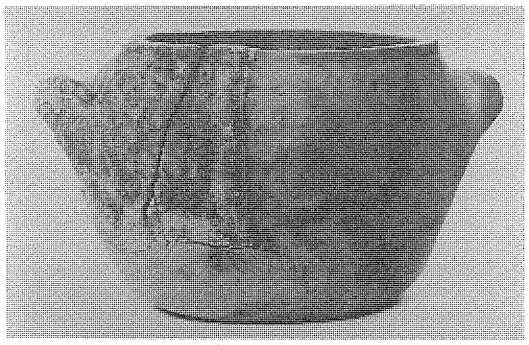


写真16　下田原貝塚出土の土器

（沖縄県教育委員会『下田原貝塚』1986年、注11より）

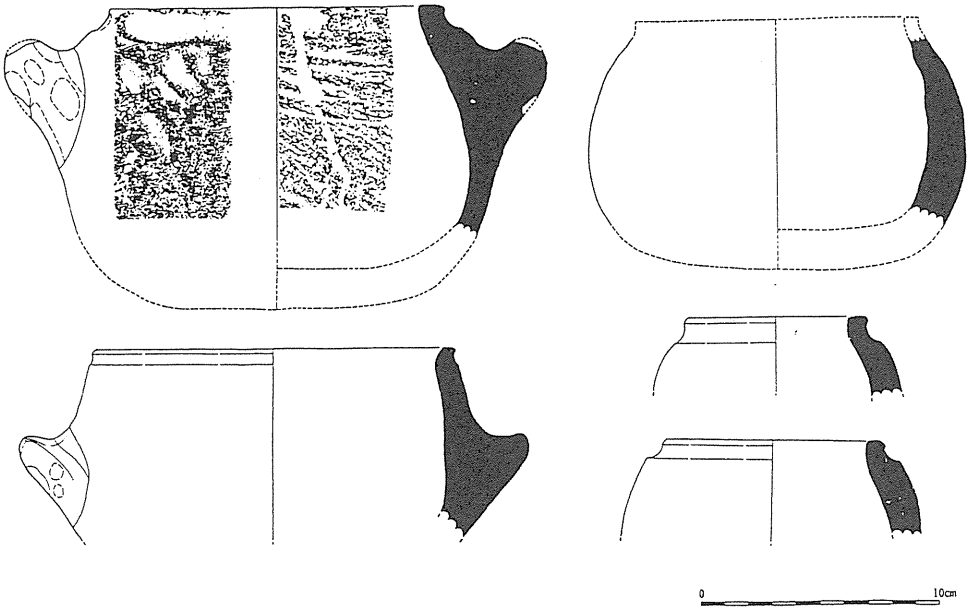


図5　下田原貝塚出土の下田原式土器

（沖縄県教育委員会『波照間島下田原貝塚、大泊浜貝塚』1986年、注11より）

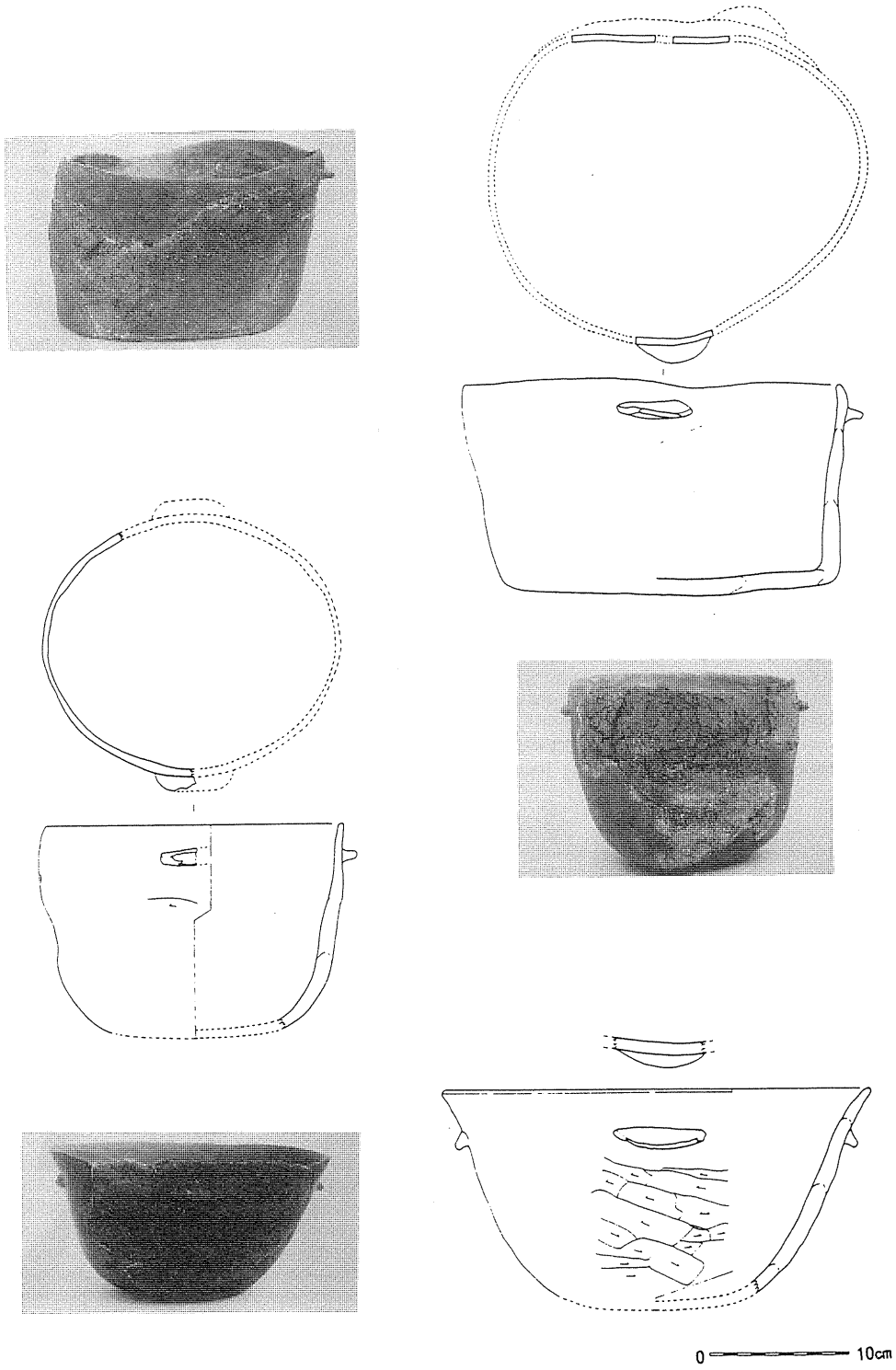


図6　上村遺跡出土の外耳土器（スク時代）

（沖縄県教育委員会「西表島上村遺跡」1991年、注35より）

Ⅱ　八重山考古学研究概史

八重山における考古学的研究の初見は、一八八七年の田代安定の「人類學上ノ取調ニ付キ沖縄ヨリノ通信」やその四年後に発表された「西表島古見村ノ土器」に始まる。ここで八重山の考古学史をふり返ってみたい。

蔵元廃庁以前に旧慣改革の調査のため来島した鹿児島県出身の田代安定やまた国防調査のために来島した青森県出身の笹森儀助等による報告など創始期の研究は、単に珍しい遺物を紹介したにすぎなかった。八重山での本格的な考古学調査が行われるのは、蔵元廃庁（一八九七年）後の一九〇四年（明治三七）の鳥居龍蔵博士による川平村字獅子森の遺跡（川平貝塚）や四ヶ村の西端の遺跡（川花第三遺跡）の発掘調査からである。この調査で初めて八重山において一四、一五世紀は未だに金石併用時代であり、その当時中国製の青磁などを日用雑器として使用していたことがわかった。また、鳥居は土器の両端に耳型把手が付着していることに注目し、それを「外耳土器」と名付けた。鳥居博士の調査以後は研究上の長い空白が続き、調査の進展は戦後まで待たなければならなかった。

一九五四年（昭和二九）、金関丈夫、國分直一、多和田真淳、永井昌文氏らによる波照間島の下田原貝塚の発掘が行なわれた。下田原貝塚からは、土器、石器（石斧、磨研調整された扁平円礫、石針、砂岩製角柱状石器、角状石器、石錘）、貝製品、骨器などが出土した。土器には粗い石英粒を含み、口縁近くに未発達の把手がつくものもあり、口縁は直口、無唇の形式、僅かに外反するもの、内弯するものがあり、無紋で安定感のあるフラットに近い丸底の底部の土器を下田原式土器と命名した。下田原式土器は八重山の先史土器の祖型として登場することがわかった。

また、一九五九年（昭和三四）の滝口宏団長を中心とする早稲田大学八重山学術調査団（他に西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚氏ら）によって、波照間島の下田原貝塚、西表島の仲間第一貝塚、仲間第二貝塚、平西貝塚、石垣島の山原貝塚などの発掘調査が行なわれ、学術的に多大な成果を収めた。

この調査においては、「第一期」（土器なし）、「第二期」（土器少量）、「第三期」（土器多量）、「第四期」（土器・パナリ系？）という当時としては画期的な編年がなされ、八重山の先史時代、スク時代の文化の基礎が築かれた。以後考古学的調査の進展は遅々たる状況であったが、復帰直前の一九七〇年（昭和四五）代の後半からは、開発がかなりの速度で進行し、それに伴う行政側による緊急の発掘調査が頻繁に行われている。

以下に学史上の主な文献を列挙する。

一八八七年（明治二〇）、田代安定「人類學上ノ取調ニ付キ沖縄ヨリノ通信」『東京人類學會雑誌』第二巻　第一六號
一八八九年（明治二二）、田代安定「琉球西表島古見村ノ土器」『東京人類學會雑誌』第四巻　第四〇號
一八九〇年（明治二三）、田代安定「沖縄縣八重山列島見聞餘録」『東京人類學會雑誌』第五二號
一八九四年（明治二七）、笹森儀助『南嶋探驗』
一八九四年（明治二七）、鳥居龍蔵「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」『東京人類學會雑誌』第九四號
一八九四年（明治二七）、鳥居龍蔵「琉球諸島女子現用ノはけだま及ビ同地方堀出ノ曲玉」『東京人類學會雑誌』第九巻　第九六號
一八九五年（明治二八）、田代安定「沖縄縣八重山諸島婦人頸飾珠ノ説」『東京人類學會雑誌』第一〇巻　第一〇六號
一八九五年（明治二八）、足立文太郎「琉球与那国島岩洞中ノ一頭蓋」『東京人類會雑誌』第一〇巻　第一一四號
一九〇五年（明治三八）、鳥居龍蔵「八重山の石器時代の住民に就て」『太陽』第一一巻　第五號
一九二五年（大正一四）、鳥居龍蔵「八重山の遺跡に就て」『有史以前の日本』磯部甲陽堂
一九三五年（昭和一〇）、三宅宗悦「南島の石器聚成—沖縄篇」『考古学』第六巻　第五号
一九四〇年（昭和一五）、三宅宗悦「南島の先史時代」『人類学・先史学講座』　第一六巻
一九五五年、金関丈夫「八重山群島の古代文化—宮良博士の批判に答う—」『民族学研究』第一九巻　第二號
一九五六年四月五日～一五日『沖縄タイムス』掲載、多和田眞淳「考古の旅」
一九五六年、多和田眞淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会
一九五九年、高宮廣衛、C・W・ミーヤン「八重山鳩間島中森貝塚発掘概報」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会
一九五九年、國分直一「史前時代の沖縄」岩村忍編『日本の民族・文化—日本の人類学的研究』
一九六〇年、多和田眞淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺（一）」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会
一九六〇年、早稲田大学八重山学術調査団（代表滝口宏、西村正衛、玉口時雄、大川清、浜名厚）「八重山の考古学」「結語」『沖縄八重山』校倉書房
一九六〇年九月二五日『沖縄タイムス』掲載、W・I・O考古学研究グループ報告。大濱永亘「郷土の貝塚について」、宮国進吉「考古学の体験」、大浜隆「石すく山について」、三木勝「入れ墨について」、粟盛哲夫「石垣島一周調査」
一九六一年、多和田眞淳「琉球列島に於ける遺跡の土器、須恵器、磁器、瓦の時代区分」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会

一九六四年、金関丈夫、國分直一、多和田眞淳、永井昌文「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学校研究報告』人文科学篇　第九号
一九六六年、國分直一「南島の先史土器－移入土器と島嶼土器について」考古学研究会『考古学研究』第一三巻、第二号
一九六六年、沖縄大学沖縄学生文化協会「黒島・波照間島調査報告」『郷土』第三号
一九六七年、琉球大学歴史研究会編「八重山－調査報告」『歴史研究』第三号
一九六八年、國分直一「南島先史時代の技術と文化」東京教育大学文学部紀要『史学研究』　第六六号
一九六九年、Peason, R. *Archaeology of the Ryukyu Islands.* University of Hawaii Press,
一九六九年、玉城盛勝「八重山小浜島泊遺跡採集石器について」『琉球政府立博物館－館報』
一九七〇年、沖縄大学沖縄学生文化協会「座間味島・西表島調査報告」『郷土』第八号
一九七一年、沖縄高等学校郷土研究クラブ「八重山宮良調査報告」『土』第二号
一九七一年、沖縄大学沖縄学生文化協会「国頭村比地部落・与那国島調査報告」『郷土』第一〇号（記念号）
一九七二年、當眞嗣一「八重山考古学の諸問題」琉球大学史学会『南島史論－富村真演教授還暦記念論文集』
一九七二年、國分直一『南島先史時代の研究』慶友社
一九七三年一一月二五日『八重山毎日新聞』掲載、大濱永亘「八重山の埋蔵文化財」
一九七四年、沖縄大学沖縄学生文化協会「八重山小浜島調査」『郷土』第一三号
一九七四年、金武正紀「仲間第一貝塚発見の開元通宝について」沖縄考古学会『南島考古だより』　第一三号
一九七五年、大濱永亘「八重山石垣島の新石器時代無土器遺跡」沖縄考古学会『南島考古』第四号
一九七六年、沖縄県教育委員会『八重山石垣島　平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書　第三集
一九七六年、當眞嗣一「八重山の遺跡とその文化」東京・八重山文化研究会『八重山文化』第四号
一九七七年、安渓遊地「八重山群島西表島廃村鹿川の生活復原」伊谷純一郎・原子令三編『人類の自然誌』雄山閣
一九七七年、沖縄県石垣市教育委員会『フルスト原遺跡』石垣市文化財調査報告書　第一集
一九七七年、石垣市教育委員会『八重山石垣島　カンドウ原遺跡発掘調査報告』沖縄県石垣市文化財調査報告　第二集
一九七七年、青山学院大学ヤマバレー遺跡調査団（代表三上次男、田村晃一）『沖縄・石垣島　ヤマバレー遺跡発掘調査概報』

一九七七年、高山純「南島と太平洋のシャコ貝製斧」沖縄県立博物館『沖縄県立博物館紀要』　第三号
一九七七年一二月二〇日～二三日『沖縄タイムス』掲載、「フーネ遺跡」発見の土器によせて（大濱永亘・安里進・新田重清共同報告）、「一、型式土器として分布・従来の外耳土器とは異質」、「二、フーネ遺跡発見の土器」（大濱永亘）、「三、神田原遺跡出土の土器－先史文化に貴重・くつがえされた無土器文化」（安里進）、「四、仲間第二と下田原貝塚出土の土器－有紋土器も採集－先史文化の系譜で注目」（新田重清）、「五、赤色土器発見の意義と課題－四遺跡とも同一系統・再検討されるべき編年」（新田重清）
一九七八年、Peason, Richard, Susumu Asato, Gregory Monks and David Pokotyto. Excavation on Kume and Iriomote, Ryukyu Islands. *Asian Perspectives. Vol. XXI, No.1*:
一九七八年、沖縄県教育委員会『沖縄県石垣島　吹通川河口遺跡の調査概要』
一九七八年、沖縄県教育委員会『八重山石垣島　竿若東遺跡緊急発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書　第一三集
一九七八年、新田重清「先島の先史・古代文化と南方的要素」『南島史論（二）－冨村真演教授退官・城間正雄教授還歴記念論文集』琉球大学史学会
一九七八年、沖縄県教育委員会『石城山－緊急発掘調査概報』沖縄県文化財調査報告書　第一五集
一九七八年、大濱永亘、関口廣次「八重山群島出土の古陶磁について」『物質文化』31
一九七九年、沖縄県教育委員会『石垣島の遺跡－詳細分布調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書　第二二集
一九七九年、沖縄県教育委員会『ナガタ原貝塚・船越貝塚－発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書　第二四集
一九八〇年、青山学院大学ヤマバレー遺跡調査団（代表三上次男・田村晃一）『沖縄・石垣島ヤマバレー遺跡第二次発掘調査概報』
一九八〇年、沖縄県教育委員会『竹富町・与那国町の遺跡－詳細分布調査報告書』沖縄県文化財調査報告書　第二九集
一九八〇年、沖縄県教育委員会『石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告－大田原遺跡・神田貝塚・ヤマバレー遺跡・附編＝平地原遺跡表面採集遺物』沖縄県文化財調査報告書　第三〇集
一九八〇年、新田重清「八重山諸島の考古学界に関する最近の動向について」『第四紀研究』第一八巻　第四号　日本第四紀学会
一九八一年、仲筋貝塚発掘調査団（代表大濱永亘・関口廣次・谷川章雄・中沢富士雄他）『沖縄・石垣島　仲筋貝塚発掘調査報告』
一九八一年、沖縄県教育委員会『沖縄県八重山石垣市　名蔵貝塚群発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書　第三七集
一九八一年、大濱永亘『八重山における原始・古代文化の問題と試論』先島文化研究所

一九八一年、Ryukyu Archaeological Research Team. "*Subsistence and Settlement in Okinawan Prehistory. Kume and Iriomote.*" Laboratory of Archaeology Department of Anthropology and Sociology University of British Columbia Vanconver, Canada
一九八二年、石垣市教育委員会『大田原遺跡－沖縄県石垣市名蔵・大田原遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書　第四号
一九八二年、石垣市教育委員会『桃里恩田遺跡－沖縄県石垣市桃里恩田遺跡試掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書　第五号
一九八二年、沖縄県立博物館『沖縄出土の中国陶磁（上）－ジョージH・ケア氏調査収集資料－先島編』
一九八二年、青山学院大学与那良遺跡調査団（代表三上次男・田村晃一）『沖縄・西表島　与那良遺跡発掘調査概報』
一九八二年、三島格「沖縄先島地方における無土器時代について」九州考古学会『九州考古学』第五七号
一九八三年、石垣市教育委員会『ビロースク遺跡－沖縄県石垣市新川・ビロースク遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書　第六号
一九八三年、沖縄県教育委員会『カンドウ原遺跡発掘調査報告（Ⅰ）－排水溝に伴う緊急調査』沖縄県文化財調査報告書　第四九集
一九八四年、石垣市教育委員会『フルスト原遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書　第七号
一九八四年、石垣市教育委員会『山原貝塚発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書　第八号
一九八四年、沖縄県教育委員会『カンドウ原遺跡－潅・排水工事に係る緊急発掘調査』沖縄県文化財調査報告書　第五八集
一九八五年、沖縄県教育委員会『沖縄県石垣市　アラスク村跡遺跡・ウイヌスズ遺跡発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書　第六二集
一九八五年、沖縄県教育委員会『名蔵貝塚群発掘調査報告書－県道改良工事に伴う緊急発掘調査』沖縄県文化財調査報告書　第六四集
一九八五年、大濱永亘「八重山の先史時代を考える」石垣市役所市史編集室『石垣市史のひろば』第八号
一九八五年、沖縄県教育委員会『与那国島－トゥグル浜遺跡－与那国空港整備工事に伴う緊急発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書　第六六集
一九八五年、安里嗣淳「沖縄のシャコガイ製貝斧概観」琉球大学史学会『琉大史学』　第一四号
一九八六年、沖縄県与那国町教育委員会『慶田崎遺跡－久部良小学校体育館建設工事に伴う緊急発掘調査報告』与那国町文化財調査報告書　第一集
一九八六年、沖縄県教育委員会『下田原貝塚・大泊浜貝塚－第一・二・三次発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書　第七四集

一九八六年、合田芳正「八重山式土器についての一試案―与那良、成屋、ヤマバレー遺跡出土土器の分析をとおして」『南島考古』第一〇号　沖縄考古学会
一九八七年、大濱永亘「八重山の先史文化―西表島を中心として」地域と文化編集委員会『地域と文化―沖縄をみなおすために』第四〇・四一合併号
一九八七年、青山学院大学成屋遺跡調査団（代表三上次男・田村晃一）『沖縄県八重山郡竹富町西表・成屋遺跡発掘調査概報』
一九八七年、石垣市教育委員会『崎枝赤崎貝塚―沖縄県石垣市崎枝赤崎貝塚発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書　第一〇号
一九八八年、沖縄県与那国町教育委員会『与那原遺跡―個人農家の畑地改良等に伴う緊急発掘調査報告』与那国町文化財調査報告書第二集
一九八九年、三島格『南島考古学―南島・大和および華南・台湾―』第一書房
一九八九年、國分直一「八重山の古代文化覚書―特にシナ海域とのかかわりをめぐって」地域と文化編集委員会『地域と文化―沖縄をみなおすために』　第五三・五四合併号
一九九〇年、ピアソン・リチャード、安里進、モンクス・グレゴリー、ポコティロ・デビッド（ピアソン・一枝訳）「久米島と西表島における遺跡の発掘」『文化課紀要』第六号　沖縄県教育庁文化課
一九九〇年、大濱永亘「名蔵シタダル遺跡について」先島文化研究所
一九九一年、沖縄県教育委員会『西表島―上村遺跡―重要遺跡確認調査報告』沖縄県文化財調査報告書　第九八集
一九九一年、沖縄県教育委員会『西表島―船浦スラ所跡―港湾施設用地工事等に伴う発掘調査』沖縄県文化財調査報告書　第一〇一集
一九九一年、高宮廣衛「八重山の考古学」『沖縄・八重山文化研究会会報』　第五号　沖縄・八重山文化研究会
一九九二年、沖縄県教育委員会「第四章　嘉良嶽貝塚の試掘調査」『新空港・空港拡張建設計画予定地内の遺跡―新石垣空港・久米島空港拡張建設計画予定地内の分布調査報告書』沖縄県文化財調査報告書　第一〇六集
一九九二年、大濱永亘「五　八重山スク時代の鍛冶遺跡と伝承」著者代表谷川健一『琉球弧の世界―海と列島文化6』小学館
一九九二年、高宮廣衛「八重山考古學研究略史」『陳奇祿院士七秩榮慶論文集』陳奇祿院士七秩榮慶論文集編集委員会
一九九三年、安里嗣淳「南琉球の原始世界―シャコガイ製貝斧とフィリピン」比嘉政夫編『環中国海の民俗と文化1　海洋文化論』凱風社
一九九三年、石垣市教育委員会『黒石川窯址―沖縄県石垣市黒石川（フーシナー）窯址発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書第一五号
一九九三年、石垣市教育委員会『石垣貝塚―県道真栄里新川線街路改修

工事に伴う緊急発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書
第一七号
一九九三年、石垣市教育委員会『平川貝塚―県道真栄里新川線街路改修
工事に伴う緊急発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書
第一八号
一九九四年、沖縄県教育委員会『グスク分布調査報告書（Ⅲ）―八重山
諸島―』沖縄県文化財調査報告書　第一一三集
一九九四年、沖縄県教育委員会『竹富島カイジ浜貝塚―竹富島一周道路
建設工事に伴う緊急発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書
第一一五集
一九九四年、森威史『沖縄県石垣島における新石器時代遺跡の様相』静
岡人類史研究所
一九九四年、金武正紀「土器→無土器→土器―八重山の考古学編年試案」
『南島考古』　第一四号　沖縄考古学会
一九九五年、上原静「西表島・仲間第一貝塚の調査概要」『文化課紀要』
第一一号　沖縄県教育庁文化課
一九九六年、大濱永亘「八重山の古代文化とその起源を探る―先史時代
から十六世紀の英雄オヤケアカハチ・ホンカワラの乱まで」
『東南アジア考古学』第一六号　東南アジア考古学会
一九九七年、沖縄県教育委員会『西表島・慶来慶田城遺跡　重要遺跡確
認調査』沖縄県文化財調査報告書　第一三一集

以上が主な八重山考古学の研究に関する著書、報告書及び論文である。

Ⅲ　八重山の先史時代・原史時代の編年論

現在、博物館などに掲示されている八重山考古学編年のもとになっているのは一九六〇年の早稲田大学八重山学術調査団[1]（代表滝口宏）による編年である（表1参照）。その後國分直一[2]教授による試案（表2参照）や當眞嗣一[3]氏による編年（表3参照）が提示されているが、いずれも一九六〇年の早稲田大学編年を踏襲している。

八重山の新石器時代の先史時代・スク時代を概観すると、石斧が粗造で刃部から胴部の一部を磨く半磨製石斧や、土器の器形が浅鉢型で口縁の近くに把手（外耳）がつくことなどは第一期（土器なし）、第二期、第三期と一貫している。しかし、早稲田大学八重山学術調査団の八重山での発掘調査は、短い期間に限られた遺跡の調査が行なわれたにすぎず、八重山の先史時代の文化の特質を十分に理解しないままに、本土の歴史編年観に基づいて、無土器の段階を「第一期」、土器少量の段階を「第二期」、そして土器多量となる段階を「第三期」として図式的に編年をしたものである。特筆すべきことは、近年の発掘調査で炭素14年代測定により幾つかの遺跡で有土器文化よりも無土器文化が新しい可能性が高

表1　早稲田大学八重山学術調査団による早稲田大学編年

編　年	遺　跡　名	遺　物
第一期	仲間第一（西表）	石器（磨製・半磨製）
第二期	下田原（波照間） 仲間第二（西表） 大原川付近小貝塚（西表）	土器（小量）・石器 貝器・骨角器
第三期	山原（石垣） 平西（西表） フルロウ山（小浜） フルスト原（石垣） 波照間貝塚群	土器（外耳多量・磁器その他） 鉄製品・石器・貝器・骨角器
第四期？	大原（西表） 野底（〃） 川平第一（石垣） 川平第二（〃） 川平第三（〃） 名蔵川（〃） 黒島	土器（ハナレ系？・磁器その他）鉄製品

＿＿線は各遺跡に共通するもの　（滝口宏編『沖縄・八重山』1960年，注1より）

表2　國分直一教授による南部諸島先史土器の編年（國分試案）

遺物遺跡／ステージ	土　器	共存遺物	遺　跡　名
Ⅳ	下田原式の発展形式（末流）次第にパナリ焼に近くなる。パナリ焼は下田原式の末流	磨製・局部磨研石器・貝錘 磁器	黒島・保良（宮古） 名蔵川（石垣） 川平第三（〃） 川平第二（〃） 川平第一（〃） 野底（西表） 大原（〃）
Ⅲ	下田原式の発展形式｛口縁外反 把手の発達 貝の微砕粒混入	磨製・局部磨研石器・貝錘 磁器 須恵質の土器	波照間貝塚群 フルスト原（石垣） フルロウ山（小浜） 平西（西表） 山原（石垣）
Ⅱ	下田原式　口縁直口・微弱な外反・石英粒混入・把手未発達	局部磨研石器・磨製石器・貝錘・磨り石（ハンド・ストーン）	仲間第二（西表島） 下田原（波照間）
Ⅰ	無土器	局部磨研石器	仲間第一（西表） 神田底層（礫浜上・石垣）

（國分直一『南島先史時代の研究』1972年，注2より）

表３　當眞嗣一氏による編年（八重山の原始古代史年表）

時代	原始社会	原始～古代への傾斜	古代社会（前期）	古代社会（後期）
	第一期	第二期	第三期～	第四期
年代	AD 9世紀頃 → ?	AD 12世紀頃	AD 13世紀頃 AD 16世紀	
内容	土器の使用無、石器（多）、貝斧 焼石料理法 イノシシ、貝類 船浦貝塚 C_{14} 測定 Ⅳ層AD 四二〇年 Ⅲ層AD 六二〇年 開元通宝出土 ? Ⅱ層AD 一〇一〇年	土器の使用〈下田原式土器〉 石器 焼石料理法 イノシシ（多量） 貝製品 骨製品 須恵器移入 ?	外耳土器（盛行） 炭化米、炭化麦出土 鉄製品、鉄滓、陶磁器 宋銭、須恵器 } 海外貿易隆盛 一四七七年 朝鮮人与那国に漂着 一五〇〇年 オヤケアカハチの乱	琉球王国の支配確立
関連する遺跡	名蔵貝塚群（石垣） トナリ貝塚（小浜） 仲間第一貝塚（西表） 船浦貝塚（西表）	仲間第二貝塚（西表） 下田原貝塚（波照間）	平西貝塚（西表） 山原貝塚（石垣） 平得仲本御嶽遺跡（平得） ウンブフル遺跡（竹富） 仲上原遺跡（平得） フルスト原貝塚（大浜）	

（當眞嗣一「八重山の遺跡とその文化」1976年，注３より）

くなり、従来の早稲田大学編年の年代観が逆転する可能性が出てきたことである。それが実際に時代差なのか、何らかの文化的背景あるいは文化的系統の違いなのかは未だに明らかになっていない。研究者は先入観を廃して実証的な作業を進めることが望まれる。

以上のような経緯をふまえて、筆者は早稲田大学編年でいう八重山の先史時代及び歴史時代過渡期の文化を、赤色土器文化、無土器文化、スク文化の三つに分類し、古い順に第一期「赤色土器時代」、第二期「無土器時代」、第三期「スク時代」としたい。

その上で、八重山の先史時代の有土器文化・無土器文化、及び歴史時代過渡期（スク時代）の文化の形成過程について、文化一元論、文化二元論、文化多元論の三つの仮説の立場から話を進める。

前述した各氏の編年観は、どのような文化的背景を前提に組み立てられているのだろう。

（一）**文化一元論**（早稲田大学編年[4]・國分直一[5]教授編年・當眞嗣一[6]氏編年・三島格[7]氏編年及び近年の安里嗣淳[8]氏編年に見られる説）

文化一元論には三つの流れがある。

一つは従来の早稲田大学編年[9]（一九六〇年）に基づく考えである（國分直一[10]教授編年・當眞嗣一[11]氏編年）。これは、先史時代以来同一種族（単一民族）が、八重山諸島に居住し続けたと仮定し、土器文化は①無土器文化（土器なし）から②赤色土器文化（土器少量）へ、更に③スク文化（土器多量）へと連続していくとする発展史観或いは進化論的図式に基づく考え方である。この仮説では、八重山では最初人は海岸低地（砂丘）に住み、海進の影響を受けるにつれて丘陵に居住地を移したと理解される。即ち、海浜の砂丘（海岸低地）の無土器文化から丘陵地の赤色土器文化へ発展するという図式である。

また、三島格氏編年説[12]（表4参照）は、有土器文化から無土器文化に至る土器製作技術の喪失をいかに説明するか、という点において興味深い解釈を示した。氏によれば、有土器・無土器の違いは文化や年代の差違に基づくものではない。有土器遺跡は定住地であり、海岸の砂丘の無土器遺跡は出先キャンプ地であって、両者は同一文化内における二つの異なる遺跡利用の仕方を示すに過ぎない。両者は相互補完的関係であるとするのである。

近年、発掘調査における炭素14測定などの年代測定の結果によると、無土器文化が新しく、赤色土器文化が古いものであるという結果が出ている。それからしても、早稲田大学編年は現状では支持されない。したがって文化一元論の早稲田大学編年は大きな修正をせまられているといえる。文化一元論の早稲田大学編年の修正後に生まれた今一つの仮説として安里嗣淳氏説[13]（表5参照）がある。

安里嗣淳氏説は文化一元論に立脚するものであるが、その主な論拠は自身が調査した与那国島トゥグル浜遺跡[14]や宮古島浦底遺跡[15]の調査結果にある。氏の知見に依れば、トゥグル浜遺跡と浦底遺跡は土器が発見され

表４　三島格氏による編年「南部群編年表」

編年	前期	中期	後期	晩期
遺跡	仲間第一貝塚（西表） 神田貝塚（石垣）	下田原貝塚（波照間） 仲間第二貝塚（西表）	波照間貝塚群 フルスト原（石垣） フルロウ山（小浜） 平西（西表） 山原（石垣）	大原（西表） 野底（西表） 川平1・2・3（石垣） 名蔵川（石垣） 保良元島（宮古）
遺物	石器 （磨製、局部磨製）	土器 石器・貝器・骨角器	土器 石器・貝器・骨魚器 鉄製品・陶磁器	土器 石器・貝器・骨角器 鉄製品・陶磁器
土器	―	（下田原式）	八重山式	（パナリ焼）
備考	（この文化は、骨角器をもつのではないか　？－筆者）	下田原（1310±90、B. C.、Gak－3765、1830±100、B. C.、Gak－3766）	外耳発達 ウシ出現 景祐元宝 陶磁－華南・安南系 コメ圧痕（インディカ） （船浦貝塚－1010±60　A. D.）	保良の青磁－福建系

滝口宏編『沖縄・八重山』、國分直一『南島先史時代の研究』により補修（三島格）
（三島格『南島考古学－南島・大和および華南・台湾－』1989年、注７より）

表5　安里嗣淳氏による編年「南琉球圏（宮古・八重山）の先史時代の編年」

石器の技術段階	新石器時代			
時期区分	前期		後期	
遺跡の立地	海岸に近い低地石灰岩地帯の赤土台地や、礫層などの赤土台地に多い		海岸に近い砂地に多い	
貝殻や獣骨	比較的少量		貝殻が多量で、貝塚を形成することが多い	
焼石、焼石遺構	不明（焼石を伴う例はあり）		焼石顕著、一部遺跡で大量の遺構	
石器	半磨製・局部磨製が多い 比較的偏平で、小型が多い		半磨製・局部磨製が目立つ 前期に比較して研磨面やや拡大、ていねいな仕上げ、大型化の傾向。方角片刃石斧まれに伴う	
土器	下田原式土器		無土器	
共伴遺物（在来品）	スイジガイ突起部加工品、サメ歯製品		スイジガイ突起部加工品、サメ歯製品、貝盤、貝斧（一部遺跡では大量出土）	
時代を示す共伴遺物（外来品）			玉縁口縁の白磁碗 須恵器 滑石製石鍋 開元通寶（貨銭）	
遺跡の例	与那国島	未発見＊	与那国島	トゥグル浜遺跡
	波照間島	下田原貝塚	波照間島	大泊浜貝塚
	西表島	仲間第二貝塚	西表島	仲間第一貝塚 南風見貝塚
	石垣島	大田原遺跡 フーネ遺跡	石垣島	崎枝・赤崎貝塚 名蔵貝塚、神田貝塚
	宮古諸島	添道遺跡	宮古島	長間底遺跡 浦底遺跡

＊トゥグル浜遺跡は発掘範囲（約1,500平方メートル）は無土器だが、遺跡の立地は石炭岩台地の赤土上に形成されていて、前期的様相を呈している。

（安里嗣淳「南琉球の原始世界－ジャコガイ製貝斧とフィリピン」1993年，注8より）

なかったことから無土器時代の遺跡である。それよりも時代的に遡る有土器時代の下田原貝塚[16]と比較しても、石斧の形態は大局的に見て同一系統と認められ、スイジガイ製利器やサメ歯製垂飾、石錐等、遺物に共通する要素が多い。したがって、本来土器造りの文化を携えていた民族が、何かの状況でそれを失い、無土器文化となった後に、スク時代に再び土器の製作技術が伝えられたのではないか、とするのが氏の仮説である。土器の消滅についてはポリネシア[17]における状況を想定してみればよいと思う。

文化一元論は、赤色土器文化と無土器文化の関係をあくまで土器という文化要素の欠落、或は喪失としてとらえ、シャコガイ製貝斧などの新しい文化要素の導入・伝播はあっても種族の交替までは想定していない。ただ、この仮説を裏付けるには、赤色土器文化と無土器文化の年代的懸隔（ミッシング・リング）を埋める資料が必要であり、この仮説の当否は今後の調査の進展に懸かっている。

（二）**文化二元論**[18]（リチャード・ピアソン教授の二元説[19]、高宮廣衛教授編年[20]、金武正紀・阿利直治・金城亀信氏らの編年[21]）

①　リチャード・ピアソン教授の二元説[22]

これは、東南アジア考古学者のリチャード・ピアソン教授の考え方である。八重山の島々で、同じ時期に、土器を用いる人々と用いない人々が一緒に住んでいたという考えである。

系統の異なる二つの文化、即ち無土器文化と赤色土器文化は共存共栄しながらスク時代の文化に発展するという考えである。例えば、大きな島（台湾、フィリピンのルソン島）の中では複数の種族が共存でき、新しい集団の移動にあたっては淘汰やドミノ現象によって、人口は山奥への移動、逃避するなどの可能性が考えられる。しかし、八重山などの小さな島々ではそれは考えにくい。八重山のそれぞれの島に住む異種族間でなんらかの交流があったことを想定することは不可能ではないが、現在までこのようなことを示す遺跡や遺物などが発見されていない。異文化集団間で交流があった可能性は否定できないが、両者が長期にわたり小さな島嶼内で共存したとする考え方には疑問がある。仮に有土器と無土器の文化が併存するとした場合、その違いは主たる生業活動（社会的分業の結果）の違いと考える方がむしろ自然であるように筆者には思える。いずれにしても赤色土器文化と無土器文化の前後関係が明確になった現在ではこの仮説は受け入れられない。

②　高宮廣衛教授編年[23]（表6参照）

一九九一年九月二七日、高宮教授は「沖縄・八重山文化研究会」の月例会で「八重山の考古学」をテーマに発表し、この中で異文化の交替[24]を念頭において、作業仮説としての八重山地方の考古学編年を提示した。

また、「八重山考古学研究略史[25]」の中で編年の内容について「八重山の遺跡を多和田真淳の呼称に倣って大きく下田原貝塚文化・仲間第一貝塚文化、川平貝塚文化の三文化に区分し、前二者を先史時代に比定、後

者を原史・歴史時代の指標とした。将来の資料によって一時共存する可能性も考えられ、そのため若干左右にずらして配置しその可能性を実線「?」マークで示した。仲間第一貝塚文化は石斧を主体とする仲間第一貝塚文化と貝斧の特色のある名蔵貝塚文化に分けてみた。その当否は今後の研究を通して検証していきたい。同様に仲間第一貝塚文化から次の川平貝塚文化への移行についても関連があるのか、あるいは不連続の交替を意味するのか、今後の資料を待って検討することにしたい」と、述べている。

表6　高宮廣衛教授編年「八重山地方の考古編年」

歴（原）史時代	川平貝塚文化	後期	パナリ焼
			中森式土器
		前期	ビロースク式土器
			新里村式土器
先史時代	? ↑ 下田原式土器（仲間第二式土器）／下田原貝塚文化（有土器文化）		仲間第一貝塚文化（石斧） 名蔵貝塚文化（貝斧） ↓ ? 仲間第一貝塚文化（無土器文化）

（南島考古雑録（Ⅱ）「八重山考古編年（私案）の一部修正」1996年，注24より）

③　金武正紀・阿利直治・金城亀信氏らの編年[26]（表7参照）

金武正紀・阿利直治・金城亀信氏らは、先史時代の有土器文化（下田原期）の石垣島大田原遺跡[27]、波照間島の下田原貝塚[28]、無土器文化（無土器期）の石垣島の神田貝塚[29]・崎枝赤崎貝塚[30]、波照間島の大泊浜貝

表7　金武正紀・阿利直治・金城亀信氏らの編年試案「八重山の考古学編年」

編年			土器	石斧・貝斧	陶磁器・開元通寶	立地・石垣	主な遺跡
先史時代	下田原期	（参考） ^{14}C 3970±95 ～ ^{14}C 3580±65	下田原式土器	石斧	無し	砂丘後背の微高地	下田原 仲間第二 大田原
	無土器期	（参考） ^{14}C 1770±70 ～ 12世紀前半	無し	石斧 貝斧	開元通寶 中国陶磁器（北宋末）が僅かに出土 徳之島カムィ窯須恵器	砂丘	仲間第一 大泊浜 崎枝赤崎
歴（原）史時代	新里村期	12世紀 ～ 13世紀	新里村式土器 ビロースク式土器	石斧僅か	中国陶磁器（北宋末～南宋）が少量出土	丘陵上や平野 石垣無し	新里村東 ビロースクの2・3層
	中森期	13世紀 ～ 17世紀	中森式土器	無し	中国陶磁器（元～明）が大量出土	〃 石垣が登場	鳩間中森 新里村西
	パナリ期	17世紀 ～ 19世紀	パナリ焼	無し	湧田・壺屋陶器や八重山陶器が出土	近世の廃村や現村落	新城島

（金城正紀「土器→無土器→土器－八重山の考古学編年試案－」1994年，注21より）

塚[31]、歴（原）史時代の竹富島の新里村遺跡[32]、石垣島のビロースク遺跡[33]（石垣島）等を発掘調査している。当初（一九八九年）、氏らの考えは一元論の早稲田大学編年の修正[34]であった。共同研究者金武正紀[35]氏は「土器→無土器→土器－八重山の考古学編年試案－」のなかで、――今回の編年試案は早稲田編年第二期を「下田原期」、第一期を「無土器期」として逆転させた。しかし、この編年試案は下田原期が無土器期より古いということであって、下田原期から無土器期へと連続するということではない。下田原期と無土器期の間には14C年代や出土遺物などから考えて二〇〇〇年前後の空白がありそれを結びつける資料は現在のところ皆無である。このことから、下田原期がある時期に消え、新たに無土器期が登場する「人の移動」が考えられる。新里村期の特徴は無土器期の後に、新里村式土器、ビロースク式土器などの土器が登場することである。さらに、集落には石垣は登場しない時期である。また、無土器期の終末に僅かに出土する中国陶磁器が若干増加し始める。中森期は従来「八重山式土器」とか「外耳土器」と呼ばれた土器を高宮廣衛氏が鳩間島中森貝塚出土の土器を標式として「中森式土器」を提唱しており、その中森式土器をもつ文化である。さらに、この時期に初めて「集落」や「スク」に石垣が登場し、海外交易によって多量の中国陶磁器が入ってくる時期で、八重山の隆盛期と考えられる。パナリ期はいわゆるパナリ焼（土器）のほかに湧田・壺屋陶器が持ち込まれ、地元の山田平等窯や黒石川窯などの陶器が使用される。パナリ焼（土器）はこれまで発掘調査された一二～一六世紀の遺跡から出土していないことから、一七世紀以降と考えられる――と、報告している。

（三）**文化多元論**[36]（大濱編年に見られる説[37・38]・表8参照）

著者は一九七九年以来、有土器から無土器への展開は異なる時期に伝播してきた系統の異なる文化によるものだとする考えである。現在のところ、無土器文化と赤色土器文化の立地場所や年代観がほぼ確定している。また双方の遺跡が年代的に共存した可能性が乏しいので、ここでは文化多元論の立場から、次に見えるような三つの系統の文化の流れを想定した。

①　赤色土器文化　　②　無土器文化　　③　スク文化
［大田原遺跡］　　［仲間第一貝塚］　　［仲筋貝塚］
三九八五±九五年ＢＰ　一二五〇±六五年ＢＰ［フルスト原遺跡］

（四）**筆者の仮説**

ところで、まだ不十分な証拠しかないが、筆者は次のような仮説を考えている。

八重山の新石器時代（先史時代）の赤色土器文化を担った人々は、中国南部から東南アジア島嶼にかけてのどこかにあった故郷地（筆者の予想では、台湾島[39]のどこか）から、約四千年前頃[40]に新天地を求めて八重山に民族移動を行った。その原因については明らかではない。この文化はおそらく農耕を伴っていた。彼らは劣悪な自然の条件などに翻弄され、不安定な生産基盤しかもたなかっただろう。また、過度な狩猟や漁撈に

表8．大濱による編年

推定年代	編年				海面	遺跡の内容	主な遺跡
	先土器時代					洞穴・フイッシャ	
10000年前 4000年前 ・3970年前頃 大田原遺跡 ・3580年前頃 下田原貝塚 3500年前 ・3260年前頃 下田原貝塚	新石器時代	先史時代	?←赤色土器時代→?（有土器時代）	第一期	海進 海退	①. 海岸低地砂丘の奥、洪積台地や平地、石灰岩の風化層の赤土上に立地している。 ②. 土器は混和材として石英か長石を用い、ほとんどが無紋土器であるが、遺跡により爪形文、指頭圧痕文、沈線文、山形押型文等の有紋土器が数点採集される。 ③. 石斧のほとんどが緑色片岩を使用し半磨製石斧である。 ④. 遺跡ごとに貝塚形成の有無、共伴遺物に著しい違いがある。 ⑤. 食料残滓の貝殻が少ないこと。	石垣島 大田原遺跡 フーネ遺跡 平地原遺跡 ヒウツタ遺跡 西表島 仲間第二貝塚 与那良原遺跡 波照間島 下田原貝塚 与那国島 トゥグル浜遺跡 多良間島の添道遺跡
2700年前 ・2520年前頃 浦底遺跡 ・2200年前頃 名蔵貝塚群 2000年前 ・1540年前頃 神田貝塚 ・420年ＡＤ ・620年ＡＤ 船浦貝塚 1500年前 ・1250年前頃 仲間第一貝塚 1200年前 ・945年前頃 名蔵貝塚群 ・940年前頃 神田貝塚 ・1010年ＡＤ 船浦貝塚			?↑無土器時代	第二期	海進 海退 海進 海退	①. 河口や湧水のある海岸低地砂丘に立地している。 ②. 明瞭な貝塚を形成している。 ③. 土器が全く確認されない。土器に代わって、調理に用いられた多量の砂岩製の焼石が発見される。 ④. 石斧も刃部や胴部の一部を研磨する半磨製石斧が主であるが、豊富な石材を用い、両面を広く磨いている。 石斧の製作技法は進歩し、カヌーを製作するのに用いられた可能性のあるシャコガイ製貝斧や柱状ノミ型磨製石斧、船のイカリだと思われる石錘等が発見される。 ⑤. 銭貨「開元通寶」（621年初鋳）が発見される。 石垣島：崎枝赤崎貝塚33枚 吹通川河口貝塚１枚 嘉良嶽貝塚群１枚 西表島：仲間第一貝塚３枚 ⑥. 波照間島．大泊浜貝塚の第四層から滑石製石鍋（長崎県西彼杵半島産）や類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）、中国製の白磁玉緑碗・白磁端反り碗、褐釉陶器、鉄鏃等が出土した。	宮古島 浦底遺跡 長間底遺跡 石垣島 名蔵貝塚群 崎枝赤崎貝塚群 西表島 仲間第一貝塚 船浦貝塚 上原貝塚 小浜島 ウリンダ貝塚 波照間島 大泊浜貝塚
12世紀頃 16世紀頃	金石併用時代	原史時代	スク時代	前期 後期		①. 海岸砂丘、島々を取り巻く裾礁の割れ目が一望できる洪積世・石灰岩の丘陵・平地、洞穴等に立地している。 ②. 12世紀頃、北からの渡米者の積極的な南島経営により、中国との密貿易の中継地として発展する。 ③. 交易に依って中国製の多数の貿易陶磁器（白磁、青磁、染付、褐釉陶器）等がもたらされた。 ④. これらの遺跡は武士の家・武士の屋敷・武士の山、大和墓、元村等とも呼ばれ、大部分が中世の村跡や墓地といわれている。 1390年－宮古・八重山、初めて沖縄島の中山に入貢。 1477年－朝鮮人３人、与那国島に漂着 1500年－「赤蜂・堀川原の乱」起こる	石垣島 石底山遺跡 山原貝塚 ビロースク遺跡 川平貝塚 仲筋貝塚 名蔵シタダル海底遺跡 西表島 平西貝塚 与那良遺跡 鳩間島 中森貝塚 与那国島 与那原遺跡

※．「？←」は文化の上限、「→？」は文化の下限の年代、及びその様相が現在のところ不明であることを示す。「〰」は、ミッシング・リングを示す。海面については、林朝棨「概説台湾第四紀的地史並討論其自然史和文化史的関係」を参照した。また、推定年代は炭素14測定法による年代や海退・海進の年代である。

よって山の幸・海の幸が枯渇するような状況も考え得る。多分そうした理由により、この文化集団は約三千三百年[41]前頃には八重山を離れて他の島嶼地域へと移住したようだ（あるいは絶滅したかもしれない）。その後、約八百年間の文化の断絶を置いて、約二千五百年[42]前頃に今度はフィリピン[43]方面から黒潮ルートに乗って無土器文化を携えた文化集団が渡来する。

一二世紀頃[44]には、九州から商人・武士たちが鉄器の生産技術、滑石製石鍋（長崎県西彼杵半島産）や類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）、鉄器、中国製の玉縁白磁、褐釉陶器などを携え南島の島伝いに渡来してくる。彼らは（無土器時代から住んでいた）在来の人々と融和し、八重山の島々を拠点にして一五～一六世紀頃、中国南部との積極的な交易を行なったと考えられる。この仮説と文化一元論との大きな違いは、文化一元論が外からの文化の伝播があっても文化集団の断絶や交替は認めないのに対し、本仮説は文化の交替や断絶に伴う集団の消滅と交替を前提にしていることである。赤色土器時代と無土器時代の間のミッシング・リングの存在やスク時代における様々な人と文化の交流の証しは、本仮説に有利な材料のように思われる。

八重山諸島は、中国大陸と島々を結びつける交通の要衝の位置にあり、永い年月にわたって、種族や文化の交流ルートの架橋となった結果、複雑な文化的要素をその基層に内包することになったのである。

Ⅳ　先土器時代（旧石器時代）

沖縄本島や宮古島では、琉球石灰岩地帯の洞穴、割れ目（フイッシャー）から化石人骨（更新〈洪積〉世の人類）が発見されている。化石獣骨のリュウキュウジカやリュウキュウキョン等の出土や、イノシシ等の生息から、それらを追い求めてホモサピエンス（沖縄本島の山下町洞人[1]＝約三万二千年前、宮古島のピンザアブ人[2]＝約二万五千年前、港川人[3]＝約一万八千年前）が渡来してきたと推測される。

石垣島でも石灰岩地帯の洞穴、フイッシャーから鹿化石が発見されており、標高二〇～五〇mの等高線上に洞穴などが点在している。一帯の落ち込み洞穴（方言では牛喰い洞穴[4]と言う）から化石人骨が発見される可能性は大きい。

これまで発見された化石の出土地には次のようなものがある。

① 石底山[5]のフイッシャー（リュウキュウジカ、クマネズミ、ヤエヤマコウモリ、ミナミイシガメなど）

② 轟川中流マシクナー一帯[6]

③ 宮良川中流の赤下橋一帯（鹿化石［歯］）

④ 大マンゲー（鹿化石）
⑤ 宮古島上野村豊原ピンザアブ[7]洞穴（ヤマネコ、ノロジカ、イノシシ、ケナガネズミ、カエル、ヘビ）
⑥ 宮古島平良市大神島[8]（ゴンホテリウムゾウの化石）
⑦ 宮古島平良市島尻海岸[9]（トリロホドンゾウの化石）

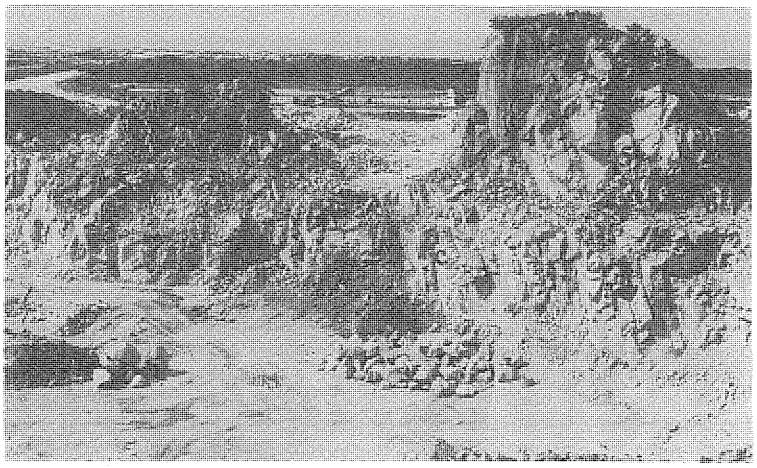


写真1　石スク山遺跡の全景

写真2　白保採集のリュウキュウジカ

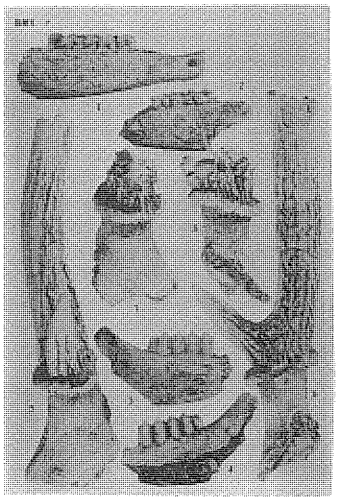


写真3　石スク山出土のリュウキュウジカ

（沖縄県教育委員会『石城山』1978年、注5より）

写真4　ピンザアブ洞穴出土のノロジカ

（沖縄県教育委員会『ピンザアブ洞穴』1985年、注2より）

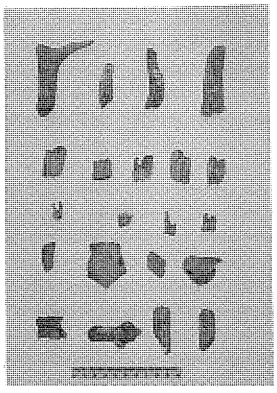


写真5　石スク山採集の化石類

V　新石器時代

先島文化圏の八重山における新石器時代の先史時代第一期の赤色土器時代の始まりについては、石垣島の大田原遺跡のカーボン年代測定法の数値では三九七〇±九五年ＢＰが最も古く、現在のところ約四千年頃前まで遡ることができる。ただ、それ以前に人類が居住した可能性は否定できない。下限は現在のところ不明である。先史時代第一期の赤色土器時代（有土器時代）の遺跡は、海岸の洪積台地、ビーチロック丘陵、古期砂丘、新期砂丘のやビーチロックとの境目に立地している。また、先史時代第二期の無土器時代は、海岸低地新期砂丘に立地している。赤色土器時代と無土器時代との間にはミッシング・リングがあり、無土器時代の上限（古さ）は約二千五百年まで遡ることができる。下限は原史時代の一二世紀頃から一六世紀頃の中国との密（私）交易を主としたスク時代に続く。一五〇〇年オヤケアカハチ・ホンカワラの乱で琉球王国からの侵略を受け、歴史時代の琉球王国時代となる。

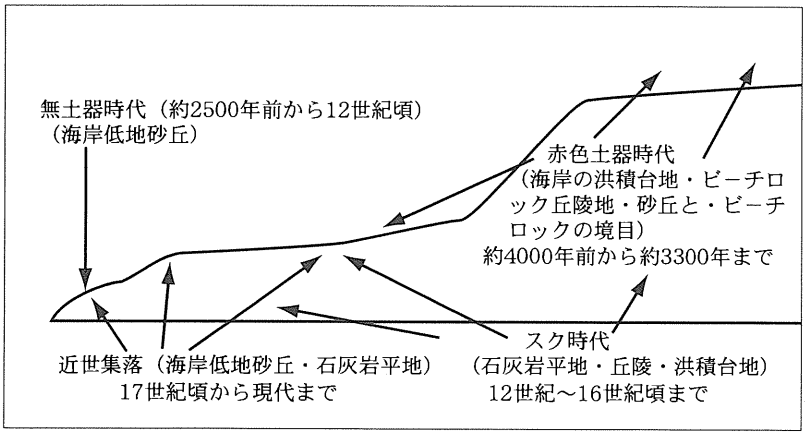


図１　各時代における遺跡の形成場所（断面）